

法政大学
国際日本学研究中心
国際日本学研究所

Hosei University Research Center
for International Japanese Studies

The Newsletter



No.17 Nov.2012



C O N T E N T S

シンポジウム報告	2
研究会報告	14
東アジア文化研究会報告	22
勉強会報告	35
研究所訪問報告	43
新刊案内	44

2012年6月4日(月)～6日(水)

国際シンポジウム

「ヨーロッパの博物館・美術館保管の
日本仏教美術コレクションと日本観の形成」
(パラツ・ウォフフ:ポーランド)

文部科学省「国際共同に基づく日本研究推進事業」（平成 22 年度）採択プロジェクト「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」

国際シンポジウム

ヨーロッパの博物館・美術館保管の日本仏教美術コレクションと日本観の形成

- 日 時：2012 年 6 月 4 日（月）～ 6 月 6 日（水）
- 共 催：法政大学国際日本学研究所
チューリッヒ大学文学部東洋学科日本学部門
アダム・ミキエウチ大学（ポズナン大学）文学部東洋学科
- 会 場：パラツ・ウォフフ（ポーランド）

国際日本学研究所は文部科学省の「国際共同に基づく日本研究推進事業」に採択された研究プロジェクトである「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」の一つの締めくくりとして、去る 6 月 4 日から 6 日までの三日間、スイスのチューリッヒ大学文学部東洋学科日本学部門（ラジ・シュタイネック教授）との共催でポーランドのワルシャワ郊外パラツ・ウォフフ会議所において、「ヨーロッパの美術館・博物館の日本仏教美術コレクションと日本観の形成」というテーマで国際シンポジウムを開催した。シンポジウムでは、まず、本研究のパートナーとなっているヨーロッパの博物館・美術館の館長や学芸員が現段階での研究成果の報告を行うとともに、共同研究者と討論する場を設けた。地元共催者はポーランドのポズナンのアダム・ミキエウチ大学文学部東洋学科（マチェイ・カーネルト教授）であった。

ヨーロッパ側からは 12 国 23 箇所の博物館・美術館や大学または図書館から 40 名を超える研究者の参加を得た。そのなかには、日本の国際交流基金の援助によってポズナン大学が招聘した中部・東部ヨーロッパとバルト地方の若手研究者を中心とした参加者が 14 名、チューリッヒ大学の予算による参加者が 2 名、またはそれぞれの館の予算で参加した方が何名もいた。

法政大学側からは安孫子信国際日本学研究所所長、小口雅史とクライナー両教授、客員所員の彬子女王殿下、シュタイネック・智恵、口井知子、神野祐太、また、共同研究者で日本美術史を専門とする須藤弘敏弘前大学教授、島谷弘幸東京国立博物館副館長、丸山士郎東京国立博物館博物館教育課教育講座室、河合正朝千葉市美術館長が参加した。

さらに、ポーランド駐在大使館の山中誠大使には開催のご挨拶をいただき、国際交流基金ブダペスト日本文化センター所長の岩永絵美様が 3 日間にわたって出席して下さった。

この企画に対しては既に準備の段階からヨーロッパ側から大きな関心が示されていたが、各博物館・美術館の特別展示の準備、常設展のやり直しあるいは改築、組織の新設などで学芸員が参加できなくなった事例がいくつもあった。サンクト・ペテルブルクの宗教美術館、クラコフ国立博物館、ローマ国立民族学博物館ルイジ・ピゴリーニとパリの海外美術館ケー・ブランリーが報告を準備し、紙上参加のかたちで加わって下さった。

シンポジウムはおよそ 4 つのセッションで組織された。まず、小口教授がこの研究プロジェクトが目指している目的をもう一度説明したうえで、シュタイネック・智恵がプロジェクトの現段階での成果を報告した。研究や資料収集は継続中であるが、すでに 62 箇所の博物館・美術館との協定が成立しており、また、17 箇所の館との交渉が進んでいる。現時点で 2700 点の美術・工芸品のデータがデータベースに入力されている。数でいうと、仏像が最も多く、それにお札、絵画と仏具が続いている。なお、仏像、絵画とお札をあわせて見ると、最もよく描かれているのは観音菩薩で、次いで地藏菩薩、不動明王、日蓮、中山鬼子母神と弁財天が続いている。このような傾向からは、ヨーロッパの収集家の思想やヨーロッパ人の仏教に対する考え方を窺うことができるのではないかとと思われる。

それに続く報告では、ヨーゼフ・クライナーとジョセフ・キブルツ両氏がヨーロッパにおける日本美術、なかんずく仏教美術のコレクションの歴史を解説した。クライナーは 16 世紀から現在にいたるまでにおよそ 4 つの時代に分けることができると説明し、その中で主に 16 世紀から江戸時代初頭にかけてと、明治時代を中心として 19 世紀なかばから第一次世界大戦までの 2 つの時期に日本美術の流出が目立っていると強調した。キブルツ氏は 1615 年にイタリアのパドヴァで出版された日本の仏像の石版の元は、ローマにあったイエズス会士アタナシウス・キルヒャーが集めた博物館のもので、絵画ではなく、むしろ仏像のかたちでローマに蒐集された、と解説した。

第 2 のセッションでは、主だった収集家の日本観、仏教についての考えないしそれぞれのコレクションの哲学についていくつかの報告が行われた。河合先生はドイツのランゲン財団のコレクションを 1960 年代以降に集めたランゲン夫妻の活動に焦点を当て、元ドイツ国立図書館東洋部長ハルトムート・ワルラベンス氏はドイツで指導的な役割をはたしたエルンスト・グロッセについて、元ミュンヘン国立民族学博物館長クラウディウス・ミュラー氏はその二代目館長マックス・ブッフナーについて、そしてパリのツェルヌスキ東洋美術館のミシェル・モキユエール氏は設立者アンリ・ツェルヌスキについて貴重な資料をわかりやすいかたちで紹介した。

第 3 のセッションでは、各博物館・美術館の日本仏教美術コレクションについての報告が行われた。彬子女王殿下は、大英博物館が所蔵する法隆寺の美術品の

複製にまつわる諸問題を取りあげた。それに続いて各博物館の担当者が報告を行った。ポーランドから 3 箇所（ワルシャワ国立博物館、クラコフ国立美術館とクラコフのマング国立博物館）、チェコから 3 箇所（プラハ国立博物館東洋美術館、ナールステックアジア・アフリカ・アメリカ文化博物館、ピルゼン市立美術館）、イギリスから 2 箇所（ロンドンのホーニマン博物館とエディンバラ・スコットランド王立博物館）、スイスから 3 箇所（ベルン国立歴史博物館、ジュネーブのバウル・コレクションとチューリッヒ大学附属民族学博物館）、イタリアから 2 箇所（トリノ市立東洋美術館とローマ国立民族学博物館ルイジ・ピゴリーニ）、スウェーデンから 1 箇所（ストックホルム東洋博物館）、ロシアから 2 箇所（サンクト・ペテルブルグの科学アカデミー付属クストカメラ博物館と宗教美術館）の報告をいただいた。

マドリッド大学のピラール・カバナス教授は、スペイン全国のコレクションについて報告を行った。また、カバナス教授を中心に 6 人の研究者が現在進めている研究プロジェクトと法政大学のプロジェクトが連携することを提案し、その場でスペイン文部省と国際日本学研究所との契約も結ばれた。これによって本学のプロジェクトがさらにヨーロッパでの研究に大きな成果を得ることができたといえる。

なお、2011 年度末に行った現地調査の成果を踏まえて、口井と神野の両氏が、スイス・リートベルグ美術館を中心にしてヨーロッパ美術館が保管する禅画と、ドイツ・ミュンヘン国立民族学博物館保管の加納鉄哉製作伎楽面と旧蔵品について行った調査報告も、これら一連の報告に続いた。

シンポジウムの 3 日目はワークショップのかたちで、ヨーロッパ側の研究者の育成のために、日本仏教美術のそれぞれのテーマについて概説的なお話をいただいた。

東京国立博物館の島谷、丸山両先生、須藤先生そして



安孫子 信 所長による挨拶

てキブルツ氏が「日本仏教美術の特色一書を中心に」「日本近世の仏教美術」と「彫刻仏像の技法」、そして「お札に見える日本仏教の仏・菩薩」という発表を行い、持参してこられた美術品の複製品を使用して、取り扱ひの諸問題を説明した。この最後のセッションはプロジェクトの非常に重要な部分で、ヨーロッパにおける日本仏教美術のみならず美術コレクションの保管全般にわたって貴重な一部であった。

最後に、チューリッヒ大学のシュタイネック教授が、この研究プロジェクトが目指している最終目的、すなわち、このような仏教美術コレクションがヨーロッパにおける日本観、日本のイメージあるいは日本像の形成へ及ぼした貢献、あるいは逆に、日本観や仏教のイメージとコレクションの収集との関係について、ヨーロッパ思想史、哲学の立場から考え、その間に現存しているようなイメージのギャップを指しながら、これからの研究課題を見事にまとめた。

参加者は夕食後も夜遅くまで熱心な議論や美術品の鑑定を行うなど、充実した 3 日間であり、寝食をともにして日本仏教美術という一つの課題に取り組むことができた。

このシンポジウムでの 35 の発表は、参加できなかった研究者の報告もあわせて、2012 年度末までに英文の最終報告書のかたちとして出版する予定である。同時に本プロジェクトではデータベースの拡充を図り、このプロジェクトを将来的になんらかの形で継続することについてもヨーロッパ側の担当者と話し合うことができたことは重要な成果であると確信している。なお、このシンポジウムの成果を踏まえて 2012 年 11 月 17 日（土）に法政大学市ヶ谷キャンパスで一般公開講演会を開催し、日本で紹介する予定である。

【記事執筆：ヨーゼフ・クライナー
（法政大学国際日本学研究所兼任所員・国際戦略機構特別教授）】



研究代表者 ヨーゼフ クライナー 特別教授による発表

MEXT/JSPS Joint International Project “Comprehensive Research of Japanese Buddhist Objects in European Museums and their Impact on the European Image of Japan”

International Symposium

Japanese Buddhist Objects in European Collections and Their Impact on the European Image of Japan

Date: Monday, 4 June – Wednesday, 6 June 2012
Sponsors: Hosei University Research Center for International Japanese Studies; University of Zurich, Department of East Asian Studies; Japanology; Adam Mickiewicz University (Poznan University), Department of Oriental Studies
Venue: Pałac Łochow, Poland

The three days from 4-6 June saw an international symposium held on the theme of “Japanese Buddhist Objects in European Collections and Their Impact on the European Image of Japan” at the conference room of Pałac Łochow located in the suburbs of Warsaw, in conjunction with the Department of East Asian Studies of the Univer-

国際合作推進日本研究項目 “欧洲博物館等所蔵日本佛教美術資料全面調査, 及以此展開の日本、日本観研究”

国際学術研究会

欧洲博物館・美術館保管の日本佛教美術作品及对日認識の形成

時 間: 2012年6月4日(星期一)~6月6日(星期三)
共同主办: 法政大学国際日本学研究所
 苏黎世大学文学部東洋学科日本学专业
 亚当密茨凯维奇大学(波兹南大学)文学部東洋学科
会 場: 波兰市 Pałac Łochow

6月4至6日历时三天, 位于波兰市郊外的会议中心内、国際日本学研究所与瑞士苏黎世大学文学部東洋学科日本学专业(Raji Steineck教授)共同举办了题为“欧洲博

국제공동연구를 기반으로 한 일본연구 추진사업 ‘유럽의 박물관 등이 보관하고 있는 일본 불교미술 자료 총조사와 이에 따른 일본 및 일본관 연구’ 프로젝트

국제 심포지엄

유럽의 박물관・미술관이 보관하고 있는 일본 불교미술 컬렉션과 일본관의 형성

일 시: 2012년 6월 4일(월)~6월 6일(수)
공동주최: 호세이(法政)대학 국제일본학연구소
 취리히대학 문학부 동양학과 일본학부문
 아담 미키에비치 대학(포즈난 대학) 문학부 동양학과
장 소: 팔라치 로호프(폴란드)

지난 6월 4일부터 6일까지 3일간 스위스 취리히대학 문학부 동양학과 일본학부문(라지 슈타이넥 교수)과 공동개최로, 폴란드 바르샤바 교외 팔라치 로호프 회의소에서 ‘유럽의 박물관・미술관이 보관하고 있는 일본 불교미술 컬렉션과 일본관 형성’이라는 주제로 국제 심포

sity of Zurich, Switzerland (Professor Raji Steineck). The symposium consisted of reports by artists and curators of museums and art museums of Europe - our partners in this research – on their research results to date. It also proved an opportunity for debate among fellow researchers. Local collaborator was the Adam Mickiewicz University, Department of Oriental Studies, Poznan, Poland (Professor Maciej Kanert). The three days were devoted entirely to the topic of Japanese Buddhist art, with participants’ fervent discussion and appraisal of works of art continuing after dinner and way into the night. The 35 presentations given at the symposium, as well as reports by scholars unable to attend, will be published in the form of a final report in English at the end of the fiscal year 2012. We also plan to introduce the achievements of this symposium at a public lecture meeting at Hosei University Ichigaya Campus on Saturday, 17 November 2012.

Report by: Josef KREINER (Staff Member, Hosei University Research Center of International Japanese Studies; Professor and Special Adviser, Hosei University Planning and Strategy Division)

博物館等所蔵日本佛教美術作品与対日認識の形成”の国際学術研究会。

此次研讨会中, 参与此项研究的欧洲博物館、美術館馆长及学术委员就现阶段的研究成果作了汇总, 同时也与其它参与共同研究的学者交换了意见。主办方是位于波兰波兹南市的亚当密茨凯维奇大学文学部東洋学科(Maciej Kanert教授)。参加者的热烈讨论一直持续到晚餐后的深夜。三天的会期内, 与会者将全部时间投入到日本佛教美術这一主题中。会议中的35篇已发表的, 以及未能参加会议的学者的报告将在2012年年末前以英文报告书的形式出版。此外, 在该会议研究成果的基础上, 2012年11月17日(星期六)法政大学市谷校区还将举行公开讲座, 将本研究成果介绍到日本国内。

【执笔者: Josef Kreiner (法政大学国際日本学研究所兼任所員・国際戦略機構特別教授)】

지엄이 개최됐다. 심포지엄에서는 본 연구의 파트너가 된 유럽의 박물관・미술관의 관장과 큐레이터가 현 단계에서의 연구성과 보고와 함께 공동 연구자와 토론하는 자리를 마련했다. 현지의 공동개최 기관은 폴란드 포즈난 아담 미키에비치 대학 문학부 동양학과(마체이 카네르트 교수)였다. 참가자들은 저녁 식사 후 밤늦게까지 열정적인 토론과 미술품 감정을 실시하는 등 알차게 삼 일을 보냈으며 숙식을 함께하며 일본 불교미술이라는 하나의 과제에 대해 깊이 있게 논의할 수 있었다. 이 심포지엄에서의 35개 발표는 참여하지 못한 연구자의 보고도 포함해 2012년도 말까지 영문으로 작성된 최종 보고서 형식으로 출간할 예정이다. 또한, 이 심포지엄의 성과를 발판으로 2012년 11월 17일(토), 호세이 대학 이치가야 캠퍼스에서 일반인을 대상으로 공개 강연회를 개최하여 일본에 소개할 예정이다.

【기사집필: 요셉 클라이너 (호세이대학 국제일본학연구소 겸담 연구소원・국제전략기구특별교수)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成22年~平成26年) 国際日本学の方法に基づく「〈日本意識〉の再検討ー〈日本意識〉の過去・現在・未来」 研究アプローチ①「〈日本意識〉の変遷ー古代から近世へ」

シンポジウム

〈日本〉を意識する時

●日 時: 2012年3月9日(金) 11:00~17:30
●会 場: 法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 26階 A会議室
●司 会: 田中 優子(法政大学社会学部教授)

去る2012年3月9日(金)、法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 26階 A会議室において、「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討ー〈日本意識〉の過去・現在・未来」アプローチ①「〈日本意識〉の変遷ー古代から近世へ」のシンポジウム「〈日本〉を意識する時」が開催された。今回の4件の研究報告の概要は以下の通りであった。

1. 木村純二(弘前大学) / 和辻哲郎の日本意識ー国民道徳論との関連からー

明治維新後に生じた表面的な欧化政策が行き詰まりを見せた明治20年代は、大日本帝国憲法の発布(1889年)や教育勅語(1890年)などによる「上からの統制」と、日清戦争の勝利による国家意識の高まりという国民の内面のあり方の変化を背景として生じたのが、天皇への「忠」と「孝」とが一体化し、武士道によってええられた国民道徳という考え方であった。

井上哲次郎は国民道徳を武士道に基づいて説いた代表的な論者であった。井上は、武士道の本質は皇室の護衛、国家の防衛といった忠君愛国の考えに基づくものであり、江戸時代は主君への忠義が忠君愛国の考えに優先されるという、武士道本来の姿が変形された時代であるとした。しかし、これは武士道を唱えながら武士が登場する前の時代の姿を基準として参照するという倒錯した議論であった。和辻哲郎は、天皇の本質を権力ではなく権威に求め、「武士道」の「忠」の対象を天皇に向ける井上の議論は偽りであるとして批判した。そして、和辻は、武士の本来の道徳を、主従の情的な結合としての「献身の道徳」として、過去の道徳はそのままでは現在の道徳とならないことを指摘した。和辻が国民道徳論を批判した理由は、和辻には、日本文化の研究を行う際の障壁となる国民道徳論を乗り越える必要性があったためだった。

このように、和辻は歴史的な観点から合理的な批判を行ったものの、道徳の内容を分析するだけで道徳がもつ効果は分析されていない。その点で、「献身」の対象を求める人々の非合理的な感情に対して説得的な議論とはなりえなかったといえるだろう。

2. 横山泰子(法政大学) / 幕末の災いと日本意識

文明の進化は人間や国家の高度化をもたらし、その一部が壊れると全体が被害を受けるという意味において、国民国家の成立は、局所的な問題が国家全体の問題となる。それでは、国民国家が成立する以前の段階において、天災が国難となることはあったのか。実際には、近代以前、特に江戸時代の日本においては、天災と対外関係は無関係ではないと考えられていた。

寛文近江若狭地震や、安政地震の際には、「神々が

鬼のような異国人と戦っているために地震が起きた」、「日本に開国を求めた諸国は津波で壊滅した。昔は神風で蒙古軍を打ち負かしたが、今は地震や津波が日本を救う」といった噂話が記録されている。これは、「日本が外国から侵略されるときには自然現象が窮地を救う」という観点に基づいていると考えられる。天災と外国人との関わりという点について、「地震を起こす主であると考えられていた鯨と異国人が首引きをし、地震が勝つ」という内容の鯨絵が描かれた。

また、安政のコレラが流行した際に、「異国人がもたらした石鯨が原因である」、「異国からの廻し者が放った千年モグラが原因だ」といった噂が発生するなど、「病気の原因は異国人である」という考えがあった。一方、外国人の中には、「日本人はコレラの流行を外国人のせいにしたが、日本人は、コレラ流行時のヨーロッパの人々よりも落ち着いた行動を取っていた」という評価を行う者もいた。

以上のことから、危機的な状況の際に日本が強く意識される、ということができらるだろう。

3. 福田安典(日本女子大学) / 「平賀源内の日本意識」

平賀源内に対しては、「外国の情報を得るのが難しい時代であるにもかかわらず世界に目を向けていた」、「柔軟な発想をもった人物」といった肯定的な立場から「大ぼら吹き」という否定的な見方まで、様々な評価がなされている。

各種の著作において世界各国の様子に言及するというのが、平賀源内の特徴であった。一般に、そのような世界各国の知見については、『和漢三才図会』や西川如見の『華夷通商考』が主たる情報源であるとされている。また、自著の中で対象の名称のラテン語による表記を用いたのは、「世界で通用する言語はラテン語である」という趣旨の記述を残し、平賀源内が私淑した新井白石の影響を受けていたと考えられる。

それでは、何故、ラテン語や他の言語に言及したかといえば、名物学が平賀源内の本領の発揮された分野だったからである。名物学とは中国の典籍の中に現れる事柄を日本の事柄と一致させ、漢字という「名」を日本の実在物という「物」に比定する学問であった。そして、火浣布やエレキテルを記述する際に対応する西洋語を掲載するのは、まさに名物学の手法そのものであった。名物学の手法は小説を書く際にも用いられており、その意味で、名物学は平賀源内にとって内面化した学問であるといえる。

このような平賀源内の態度を勘案するとき、「名物学を中心とし、日本にはない海外の文物を日本で生産することが日本の利益になる」ということが、平賀源内にとっての日本意識であるといえる。

4. 佐藤悟 (実践女子大学) / 19世紀の出版統制と外国

文化四(1807)年、従来の行事改に加え、四人の名主による名主改の制度が始まり、出版物の検閲体制の再編が行われた。そして、名主改制度の導入の背景には、文化露寇と呼ばれる日本とロシアの緊張関係があった。

文化元年に長崎に来航したレザノフは交渉失敗の報復のために千島と樺太への侵攻を指示して交戦し、幕府はそれに対応するために東北諸藩に出兵を命じた。千島・樺太は日本の経済活動に組み込まれた地域であり、また出兵準備等により、この事件は広く知られるようになった。

幕府は江戸において文化露寇に関わる風説の流布などを禁止する町触を出し、出版統制の更なる強化を図り、従来の行事改から名主改へと、統制を強化した。具体的には、元寇を時代背景とした『由利稚野居鷹』は、ロシア軍の侵攻を連想させたため、時代背景を承久の乱後に変更させたり、『泉親衡物語』では文章の改変を指示したなどの具体的な事例が知られている。これらの統制は、文芸作品が商業出版であったため、処罰が板元の経済的な損失に直結し、有効に機能した。

ただしこれらの規制はロシアとの関係に限られ、オランダ等との問題については放任されていたようである。

幕府の外国への危機意識は、攘夷という形ではなく、ロシアに対する情報統制という形で現れたことに注目しなければならない。

したがって文化露寇を契機として出版統制が強化されたことは事実であるが、風説の流布への対応と見るべきであり、文化元(1804)年の『絵本太閤記』の発禁処分、それに伴う色摺絵本への規制強化といった一連の出版統制策の中の一環として名主改の創始を考えるのが妥当であろう。

以上のような報告を受け、全体討論では日本意識を巡る諸問題について活発な議論が行われた。その中で、「直接体感できる危機は対象だが、体感できない危機や国難はどのように理解されたのか」、「どのような主体が国難を理解したのか」、「危機と日本意識が一体化するのはどのような状況か」、「日本意識は対外的な優越感と劣等感の合成物ではないか」といった意見が提出された。

このような意見は今後の研究を進める際の指針となりえ、2011年度の研究活動の集大成として、意義のあるシンポジウムが行われたと考えられた。

【記事執筆：鈴村 裕輔
(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】



左より：小林 ふみ子 准教授、田中 優子 教授



福田 安典 教授 (日本女子大学)



左より：佐藤 悟 教授 (実践女子大学)、横山 泰子 教授



木村 純二 教授 (弘前大学)

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project: Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

Symposium
“Times When We Perceive ‘Japan’”

Date: Friday, 9 March 2012, 11:00-17:30
Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 26F Conference Room A
Chair: TANAKA Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

Hosei University Research Center for International Japanese Studies Approach 1 Symposium: “Times When We Perceive ‘Japan’”, was held in Conference Room A of Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 26F on Friday, 9 March. In this symposium, “Japan-consciousness” was examined in the 4 research reports: “Watsuji Tetsuro’s Criticism of the Theory of National Ethics”, “Edo

战略研究基础形成支援项目 研究方法①“‘对日认识’的变迁——从古代到现代”

研讨会
“意识到‘日本’之时”

日 期：2012年3月9日(星期五) 11:00-17:30
会 場：法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦26层 A会议室
主 持：田中 優子 (法政大学社会学部教授)

2012年3月9日(星期五)、法政大学国際日本学研究所位于市谷校区の布瓦索纳德大厦26层A会議室中召开了名为“意识到‘日本’之时”的研讨会。此次研讨会中分别作了题为“对和辻哲郎国民道德的批判”、“江戸时代

전략적 연구기반형성 지원사업 연구① <일본의식>의 변천—고대에서 근세로

심포지엄
“일본”을 의식할 때

일 시：2012년 3월 9일(금) 11:00~17:30
장 소：호세이(法政) 대학 이치가야 캠퍼스 보아소나드타워 26층 A회의실
사 회：다나카 유코(田中 優子, 호세이대학 사회학부 교수)

2012년 3월 9일(금), 호세이대학 이치가야 캠퍼스 보아소나드타워 26층 A회의실에서 호세이대학 국제일본학연구소 연구①에 관한 심포지엄 ‘일본을 의식할 때’가 개최되었다. 이번에는 ‘와쓰지 데쓰로(和辻哲郎)의 국민 도덕론 비판’, ‘에도시대에 재난을 다룬 문학과 도

Period Records of Earthquakes in Writing and Illustration”, “The Activities of Hiraga Gennai”, and “External Relations and Publishing Censorship During the First Half of 19th Century”. The overall discussion then led to a debate on the issues surrounding Japan-consciousness. Questions raised included “Our focus is critical movements that we sense directly, but how were national crises, and movements that we cannot sense, understood?”, “What subject understood national crises?”, “In what kind of situation do crisis and Japan-consciousness unite?”, and “Is Japan-consciousness rather a compound of feelings of superiority and inferiority towards the external?” This symposium was the final product of research activity during 2011, but was also significant in determining the direction of activity in 2012.

Report by: SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

震灾中的文字和图像记录”、“平贺源内的活动”以及“19世纪前半叶对外关系及出版控制”的4项报告，并对“对日认识”进行了讨论。相关问题在全体讨论中也得到体现。讨论过程中汇集了参会者的各种意见。例如“(研讨)对象是可直接感受到的危机，那么无法感受的危机和国难该如何理解呢?”、“怎样的主体能理解国难呢?”、“将危机和日本意识合为一体会出现怎样的情况”，以及“日本意识是否是对外优越感和自卑感的合成体呢?”等。此次研讨会不但汇总了2011年度的研究活动，也确定了2012年度活动的方向，很有意义。

【执笔者：铃村 裕輔
(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】

상(圖像) 등에 의한 기록’, ‘히라가 겐나이(平賀源内)의 활동’, ‘19세기 전반의 대외관계와 출판통제’라는 네 분야의 연구보고를 통해 ‘일본의식’을 검토했다. 또한, 전체토론에서는 일본의식을 둘러싼 여러 문제가 논의되었다.

그중에서 ‘직접 체험할 수 있는 위기는 대상이지만, 체험할 수 없는 위기와 국난은 어떻게 이해되었을까’, ‘위기와 일본의식이 일체화되는 것은 어떠한 상황인가’, 일본의식은 대외적인 우월감과 열등감의 합성물은 아닌가’라는 의견이 제시되었다. 이번 심포지엄은 2011년도 연구활동의 집대성일뿐 만아니라, 2012년도 활동의 방향성을 확인할 수 있었던 유익한 행사였다.

【기사집필：스즈무라 유스케
(호세이대학 국제일본학연구소 객원학술연구원)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成22年～平成26年）
国際日本学の方法に基づく「〈日本意識〉の再検討ー〈日本意識〉の過去・現在・未来」
研究アプローチ②「近代の〈日本意識〉の成立」

公益財団法人三菱財団研究助成「日本民族学形成における岡正雄」

国際シンポジウム

岡正雄ー日本民族学の草分け

- 日 時：2012年3月10日（土）～11日（日）
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー26階 スカイホール
- 司 会：ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所兼任所員、国際戦略機構特別教授）

法政大学国際日本学研究所の「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討ー〈日本意識〉の過去・現在・未来」プロジェクトのアプローチ②「近代の〈日本意識〉の成立」および公益財団法人三菱財団研究助成「日本民族学形成における岡正雄」では、2012年3月10日（土）・11日（日）の二日間にわたって国際シンポジウム「岡正雄ー日本民族学の草分け」を法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー26階スカイホールで開催した。ドイツから3名、オーストリアから2名、法政大学はじめ日本国内の10名の研究者の発表があり、国内外から200名程の参加者があった。

岡正雄（1898-1982）は日本の民族学の設立の親である。旧制松本中学校（長野県松本深志高等学校）から旧制第二高等学校を経て東京帝国大学文学部社会学科を卒業した後、柳田國男の談話会に1926（大正15）年から参加し、柳田と二人で雑誌『民族』を編集・出版した。岡は、折口信夫の「まれびと」論に刺激され、論文「異人その他」（1928 [昭和3]年）で初めて注目を浴びた。その談話会が分裂した後、澁澤敬三の奨学金で1929（昭和4）年にウィーンに渡り、ウィーン歴史民族学派のW. シュミット、W. コッパス、R. ハイネ・ゲルデルンに師事。1933（昭和8）年、*Kulturschichten in Alt-Japan*（「古日本の文化層」）で博士号を取得し、1935（昭和10）年までにその原稿を全6巻、1500頁にまとめた。「日本文化はいくつかの異なった文化複合からなる、多元的起源を持つ文化だ」と主張する「幻の論文」と呼ばれた大著が、このたび初めてドイツ語の原文で出版される。このシンポジウムは、これを記念するもので、岡の学問及び日本における民族学の展開とヨーロッパの日本研究の改革に与えた影響の総括的評価を試みた。

シンポジウムの一日目は、まず、岡正雄の生涯を通じての業績を包括的に分析するとともに、その研究が日本の文化人類学やヨーロッパの日本研究に及ぼした影響について、三つの報告（ヨーゼフ・クライナー、清水昭俊先生、川田順造先生）があった。

次に、海外からみた岡の業績と日本の民族学の国際舞台における位置を取り上げた三つの報告（クリストフ・アントワイラー先生、ハンス・ディーター・オイルシュレーガー先生、桑山敬己先生）が続いた。岡は、欧米以外の研究者として初めての国際人類学・民族学協会の会長に選ばれ、1968（昭和43）年に初めてアジアで大会を開催することに成功した。

二日目は、個別研究について、まず神話研究についての二つの報告（平藤喜久子先生、クラウス・アント二先生）、日本における民族博物館の形成と岡の

尽力についての報告（近藤雅樹先生）があった。歴史的な岡の役割を取り上げた報告が二つ（中生勝美先生、セップ・リンハルト先生）と、岡の研究の方法論と歴史民族学ないし社会人類学についての報告が二つ（ベルンハルト・シャイト先生、住谷一彦先生）、最後に岡の北方研究すなわちアイヌとアラスカについての報告（岡田淳子先生、祖父江孝男先生）があった。祖父江先生と住谷先生は、当初は岡の助手として、そして後に協力者として活動してきたことを通じての、岡の個人的な側面にも触れたお話があった。最後に、岡の長男である岡千曲先生が父としての岡のことをお話し下さり、シンポジウムを締めくくった。

討論の成果として、岡の学問は、およそ次の何点かの主だったテーマにわけることができる。それは、第一に折口から継承した来訪神信仰および村のレベルで行う仮面仮装行事、第二にそれを日本以外、特にヨーロッパの現象と比較する試み、もう一つは、日本の基層文化における社会組織、特に年齢階梯制と若者組の役割、更にアイヌ研究が日本の民族・文化の起源に一つの役割を果たした北方文化の影響であった。それを統合したかたちで多角的な日本文化の起源論を提唱し、1948（昭和23）年には江上波夫、八幡一郎、石田英一郎が参加した学際的なシンポジウムを開催し、討論した。このシンポジウムは、20世紀後半の日本の民族学・文化人類学の出発点になったといえ、江上波夫、坪井洋文、佐々木高明、井上光貞、大野晋などの研究者はそこから刺激を受け、持論を発展させたのであった。

岡の組織力も非常に大きなものであった。1938（昭和13）年にウィーン大学に設立し、指導した日本学研究所において社会科学的なアプローチをとった日本研究は、アメリカ、あるいはイギリスの日本研究のパラダイムの変化より10年も早いもので、現在もその伝統を受け継いでいる研究者が大勢いる。戦時中の日本では、文部省の民族研究所を指導し、大勢の日本の民族学者・文化人類学者を育成した。また、1951（昭和26）年に東京都立大学の社会人類学科、1960（昭和35）年に明治大学社会人類学科、1964（昭和39）年に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所を設置した。それぞれの立場から、研究史に大きな影響を与えた現地調査を実施した。そのなかの重要なものだけを挙げると、明治大学のアラスカ調査、アジアの研究者が初めてヨーロッパの基層文化を研究対象とした明治大学の中部ヨーロッパのドイツ語圏村落調査がある。

ちなみに、岡が1935（昭和10）年にヨーロッパから帰国して最初に民族学について講義を行ったのは

法政大学であった。

【記事執筆：ヨーゼフ・クライナー
（法政大学国際日本学研究所兼任所員・国際戦略機構特別教授）】

Strategic Research Base Development (Grant-aided)
Project: Research Approach 2 “Establishment of Modern ‘Japan-consciousness’”

Mitsubishi Foundation Research Grant: “Oka Masao in the Formation of Japanese Ethnology”

International Symposium

“Oka Masao: The Origins of Japanese Ethnology”

Date: Saturday, 10 - Sunday, 11 March 2012

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 26F Sky Hall

Chair: Josef KREINER (Staff Member, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor and Special Adviser, Planning and Strategy Division)

Research Approach 2 and Mitsubishi Foundation held an international symposium over two days. We heard presentations from three scholars from Germany, two from Austria, and ten from scholars from Japan including those from Hosei University. There were around 200 participants from Japan and abroad.

Oka Masao (1898-1982) established ethnology in Ja-

pan. He attended school in Matsumoto, Nagano pref., and after graduating from Tokyo Imperial University in literature and social science, he participated in the conversation circle of Yanagita Kunio. Inspired by Origuchi Shinobu's theory of “*marebito* (visiting deities)”, his first acclaim came with the essay, *Ijin sonota* (Strangers and Other Topics). He travelled to Vienna on a Shibusawa Keizo scholarship, and studied under Wilhelm Schmidt, Wilhelm Koppers, and Robert von Heine-Geldern. In 1933 he received his doctorate with *Kulturschichten in Alt-Japan* (Cultural Strata in Ancient Japan). This great work proposes that Japanese culture is a conglomeration of different cultures and has multi-faceted origins. It will be published this year for the first time. This symposium intended to mark its publication, and was an attempt at an overall evaluation of Oka's scholarship and the development of ethnology in Japan, and its influence upon the reform of Japanese studies in Europe.

Report by: Josef KREINER (Staff Member, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor and Special Adviser, Hosei University Planning and Strategy Division)



関係者による集合写真

戦略研究基礎形成支援項目 研究方法② “近代‘対日認識’の形成”

公益財団法人三菱財団助成研究項目 “岡正雄と日本民族学の形成”

国際研究会

“岡正雄—日本民族学の开拓者”

日 期：2012年3月10日（星期六）-11日（星期日）
会 場：法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦26层 空中大厅

主 持：Josef Kreiner（法政大学国際日本学研究所 兼任所属員・国際戦略機構特別教授）

法政大学国際日本学研究所実施の“从国際日本学視角重新讨论‘日本认识’——‘日本认识’の過去、現在、未来”項目、方法論②“近代対日認識の形成”，以及公益財団法人三菱財団助成の研究項目“岡正雄と日本民族学の形成”，2012年3月10日（星期六）、11日（星期日）2天举行了题为“岡正雄—日本民族学の开拓者”的国际研讨会。会场设在法政大学市谷校区布瓦索纳德大厦26层空

전략적 연구기반형성 지원사업 연구② 근대 <일본의식>의 성립
공익재단법인 미쓰이(三井) 재단 연구조성 ‘일본 민족학 형성에 있어서 오카 마사오(岡正雄)’
국제 심포지엄

오카 마사오—일본 민족학의 개척자

일 시：2012년 3월 10일(토)~11일(일)
장 소：호세이(法政)대학 이치가야 캠퍼스 보아소나드타워 26층 스카이홀
사 회：요셉 클라이너(호세이대학 국제일본학연구소 겸임 담당 연구소원, 국제전략기구 특별교수)

호세이대학 국제일본학연구소의 프로젝트 ‘국제일본학 연구방법에 근거한 <일본의식>의 재검토—<일본의식>의 과거·현재·미래’의 연구② ‘근대 <일본의식>의 성립’ 및 공익재단법인 미쓰이재단 연구조성 ‘일본 민족학 형성에 있어서 오카 마사오’에서는 2012년 3월 10일(토), 11일(일)에 걸쳐 국제심포지엄 ‘오카 마사오—일본 민족학의 개척자’를 호세이대학 이치가야 캠퍼스 보아소나드타워 26층 스카이홀에서 개최했다.

독일에서 3명, 오스트리아에서 2명, 호세이대학을 비롯해 일본 국내에서 10명의 연구자가 발표했고, 국내외



司会：ヨーゼフ・クライナー 特別教授

中大厅。参会发表的包括3位德国、2位奥地利专家，以及包括法政大学在内的10位日本国内研究学者。此外，共有来自日本国内外的200名观众旁听。

岡正雄（1898—1982）被誉为日本民族学设立的奠基人。旧制松本中学校毕业后经旧制第二高中、东京帝国大学文学部社会学科毕业后，参加了柳田國男的谈话会。受折口信夫“稀客论”启发、发表论文《異人その他》而受到关注。获濹泽敬三奖学金赴维也纳，从师于Wilhelm Schmidt, Wilhelm Koppers, Robert von Heine-Geldern。1933年以<Kulturschichten in Alt-Japan>（古日本の文化层）取得博士学位。该论文被盛赞为“梦幻之作”，主张日本文化由多个文体系组成、带有多元起源的复合文化体。本次国际研讨会除纪念该论文出版外，也旨在介绍岡正雄的学术成就，探讨其对日本民族学展开和欧洲日本研究改革的影响。

【执笔者：Josef Kreiner
（法政大学国際日本学研究所兼任所属員・国際戦略機構特別教授）】

에서 200여명이 참가했다.
오카 마사오(1898-1982)는 일본 민족학의 아버지이다. 舊제도 하의 마쓰모토(松本)중학교, 제이(第二)고등학교를 거쳐 동경제국대학 문학부 사회학과를 졸업한 후, 야나기타 구니오(柳田國男)의 담화회에 참가한다. 오리구치 시노부(折口信夫)의 <마레비토>(순넬, 나그네)에 자극을 받았으며 논문 ‘異人その他’ (이방인 그외)를 발표함으로써 처음으로 주목받게 된다.

시부사와 케이조(濹澤敬三) 장학금으로 빈에 건너간 그는 빌헬름 슈미트(Wilhelm Schmidt), 빌헬름 코퍼스(Wilhelm Koppers), 로베르트 하이네겔더른(Robert von Heine-Geldern)에게 가르침을 받고 1933년, Kulturschichten in Alt-Japan ‘옛 일본의 문화층’으로 박사학위를 취득한다. 이 논문은 일본문화는 몇 가지의 다른 문화가 복합적으로 작용한 다원적 기원을 가진 문화라고 주장하고 있다. ‘환상의 논문’이라 불리는 이 대작이 이번에 처음으로 출판된다. 출판을 기념해 개최된 이번 심포지엄에서는 오카 마사오의 학문 및 일본 민족학의 전개와 유럽의 일본연구 개혁에 미친 영향을 총괄적으로 평가해 보았다.

【기사집필：요셉 클라이너
（호세이대학 국제일본학연구소 겸임 연구소원·국제전략기구특별교수）】



祖父江 孝男 名誉教授（国立民族学博物館）

法政大学サステナビリティ研究教育機構・国際日本学研究所共催

国際シンポジウム

震災後のいま問いかける

「なぜ、『雨ニモマケズ』が読まれるのか」

●日 時：2012年3月20日(火) 9:00～17:30
●会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 26階 スカイホール
●共 催：法政大学国際日本学研究所
サステナビリティ研究教育機構

東日本大震災から1年が経った3月20日(祝、火)、法政大学国際日本学研究所と法政大学サステナビリティ研究教育機構の共催による国際シンポジウム「震災後のいま問いかける」が市ヶ谷キャンパスで開催された。

午前の部では、震災後の日本社会が直面している復興に関する提言を中心に議論が行われ、午後の部では、震災当時から続く日本国民の〈秩序ある〉対応と復興精神に対する世界からの問いかけを切り口に、「なぜ、『雨ニモマケズ』が読まれるのか」と題して、「被災地域の精神の遍歴と体験知」という視点から議論が行われた。いずれの議論も、震災後の復興を支援する試みという点で一貫するものであった。

東日本大震災発後、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」が再び注目されている。未曾有の災害を経験し人間の無力さに打ちひしがれながらも、人々は、立ち上がり、前を見つめて歩きだすための力強い「言葉」を求めている。賢治が生きた大正・昭和と現代社会では、生活様式だけでなく人々の感性も大きく異なるが、時代が変わり、自然災害の規模が違っても、人間と自然との関わり方は不変である。大震災の経験から私たちが学ぶべきは、人間が自然を克服しようとする現代文明のあり方に疑問を投げかけ、自然と人間の本来の姿を再考することではないだろうか。復興とは、同時に自然との関わり方を再考する歩みでなければならない。

その過程は東北地方や日本だけの経験にとどまらず、広く人類に共有されることが望まれる。人間はどのように自然との関わり方を考えてきたかという精神の遍歴を、日本をはじめとする各国の歴史的、文化的な取り組みを通してお互いに学ぶことにより、その体験知を人類共有の智慧へと高めていきたい。そこで、このシンポジウムは、東日本大震災後の社会の動きを継続的に観察する中で、被災者や支援者が宮沢賢治の「雨ニモマケズ」を再評価しているという報道が多いことに注目し、前述の世界からの問いかけへの対応の一つとして、各国の代表者によって人類発展史、文明史に貢献できる「受難の教訓と知恵」を浮かび上がらせることが目指された。

宮沢賢治の作品は、一般的には日本文学とされることが多い。しかし、今回のシンポジウムでは作品論または文献解釈の観点による議論にとどまらず、賢治が代弁する日本文化や、現代日本人に継承され、内在している生命観、価値観を、文化人類学、社会文化学、言語社会学、東アジア学というより広い分

野から、総合的に検討した。具体的には宮沢賢治の作品を媒介に、人間本来の原風景に近い生活観、世界観、人生観を再検討することによって、戦後日本の経済発展の過程におけるこのような自然と人間の原風景ともいべき関係性に含まれる変容した、あるいは不変な要素を考察した。さらに、そこから抽出した教訓を未来の価値基準にも注入できる可能性を検討した。

東日本大震災の体験を賢治が示した原風景への転換として捉えるならば、人間にとっても生き方の転換が求められ、素朴で原初的価値観の蘇生へと繋がっていくだろう。自然との融合という普遍的な価値の可能性については、日本だけでなくアジアに広く共通する「哲学」や「思想」でもある。被災地東北出身の宮沢賢治の「雨ニモマケズ」に内在する示唆的な生き方を語ることを通じて、震災からの復興における精神力が、地球規模の生態変化の中で、持続可能な発展を試みる社会への応答とも捉えられよう。これは、日本人にとって新たな自己認識を踏まえた上での復興となるだけでなく、外国にとっても自他再認識の機会であり、日本を生き方転換のテストエリアと意識することになろう。その意味で、新たな文明創出の道筋を、海外から招いた著名なゲストたちと共に探り、その体験と知恵を共有できるシンポジウムの開催ができたと思う。

当日午後の発表者とテーマは以下の通りであった(発表順)。

- ・基調講演：杉井ギサブロー（京都精華大学教授、映像作家）／『賢治童話を今どう読み解くべきか』
- ・報告1：張怡香（世界医学院院長・教授）／Green Medicine to Detoxify our Environment（「道医（漢方）の世界観と宮沢賢治思想の接点」）
- ・報告2：雷剛（重慶出版社編集部）／宮沢賢治在中国（「なぜ宮沢賢治の作品が漢字文化圏に翻訳されているか？」）
- ・報告3：賈蕙萱（元北京大学教授）／《风雨无阻》半世紀—我的中日文化互补性考析（『雨ニモマケズ』中日文化の相互補完に関する一考察）
- ・報告4：金容煥（韓国倫理教育学会会長、忠北大学校教授）／「宮沢賢治の生命倫理の現代価値」
- ・報告5：岡村民夫（法政大学国際文化学部教授）／「イーハトーブと東北力」

注1 上記記載は同シンポにおける王敏の基調講演「なぜ、『雨ニモ負ケズ』が読まれるのか」により整理したものである。

注2 午前の部の発表者とテーマは以下の通りであった(発表順)。

報告1: 大倉季久(桃山学院大学社会学部講師) / 林業における「震災後」を問うということ—影響の範囲からの着想

報告2: 吉野馨子(法政大学サステナビリティ研究教育機構准教授) / 農はどこにいくのか? 生業・市場・消費者

報告3: 関いずみ(東海大学海洋学部准教授) / 変わりゆくものと、変わらない何か—海とくらしの姿を考える—

注3 午後の部は国際交流基金の支援を受けて行われた。御礼を申し上げます。

【記事執筆: 王 敏
(法政大学国際日本学研究所専任所員・教授)】



午後の部 全体討論の様子

Hosei University Institute for Sustainability Research and Education, and Research Center for International Japanese Studies

International Symposium

Thinking Now, One year after 3.11

“Why are we reading *Be not Defeated by the Rain?*”

Date: Tuesday, 20 March 2012, 9:00-17:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 26F Sky Hall

Sponsors: Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Institute for Sustainability Research and Education

International symposium, “Post-Earthquake: Questions Now Asked” was held jointly by Hosei University Research Center for International Japanese Studies and Hosei University Institute for Sustainability Research and Education on 20 March. Since the Great East Japan Earthquake, people have been overwhelmed by their powerlessness in the face of this unprecedented disaster. Neverthe-

less, strength-giving “words” have been sought that would help people to pick themselves up and strive forwards. To this end, Miyazawa Kenji’s *Ame ni mo makezu* (Be not Defeated by the Rain) has once more been given attention. Modern society and that of the Taisho and Showa eras, in which Kenji lived, differ not just in respect of lifestyle but also people’s emotions, yet the relationship remains unchanged between humans and nature, despite change in era or difference in scale of natural disaster. What we should learn from our experience of the Great Earthquake is our need to take steps in rethinking our relationship with nature. That process ought not stop with Japan, but become shared knowledge and experience of the human race. For this reason, themes were chosen for this symposium by representatives of each country that gave suggestions for “learning and wisdom of suffering” and that could contribute to the history of human development and civilization.

Report by: WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

法政大学可持續科学研究教育機構 国際日本学研究所 共同主办

国際研讨会
震后現状の追問

“为何要研读《无惧风雨》”

日期: 2012年3月20日(星期二) 9:00-17:30

会场: 法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦26层 空中大厅

共同主办: 法政大学国際日本学研究所
可持續科学研究教育機構

3月20日, 法政大学国際日本学研究所与法政大学可持續科学研究教育機構共同主办的国際研讨会“震后現状の追問”召开。东日本大地震中我们经历了史无前例的

灾难, 深切体会到人类渺小的同时, 我们重新站立起来, 寻找着可以让人们凝视前方迈向未来所需的强有力“语言”。于是, 宫泽贤治的《无惧风雨》再次受到关注。贤治出生的大正、昭和时代与当代社会不仅生活方式、人们的感性也大不相同。但即使时代不同, 自然灾害的规模相异, 人们与自然的相处方式却是恒久不变的。从大地震的经验中, 我们必须学习和重新思考的是人类与自然的相处之道。这个过程不仅限于日本, 更应该成为人类共有的宝贵经验。因此, 此次国际研讨会上, 来自各国的代表将题目选定在可对人类发展史、文明史作出贡献的“受难的教训和智慧”。

【执笔者: 王 敏(法政大学国際日本学研究所専任所員・教授)】

호세이(法政)대학 서스티나빌리티 연구교육기구·국제일본학연구소 공동개최

국제 심포지엄

동일본대지진 후에 지금, 묻는다. “왜 <비에도 지지 않고>가 읽히는가?”

일 시: 2012년 3월 20일(화) 9:00~17:30

장 소: 호세이(法政)대학 이치가야 캠퍼스 보아소 나드타워 26층 스카이홀

공동개최: 호세이대학 국제일본학연구소, 서스티나빌리티 연구교육기구

3월 20일, 호세이대학 국제일본학연구소와 호세이대학 서스티나빌리티 연구교육기구의 공동개최로, ‘재난 겪고 난 지금, 묻는다’를 주제로 국제 심포지엄이 개최됐다. 동일본대지진 발생 후, 미증유의 재해를 경험하고 인간의 무력함에 절망하면서도 사람들은 다시 일어섰고, 앞을 향해 전진하기 위해 힘이 되는 강력한 ‘단어’

를 원했다. 이러한 가운데 미야자와 겐지(宮沢賢治)의 <비에도 지지 않고>가 다시금 주목받고 있다.

겐지가 살았던 다이쇼(大正, 1912-1926)·쇼와(昭和, 1926-1989)시대와 현대사회는 생활양식만이 아닌 사람들의 감성도 크게 다르지만, 시대가 바뀌고 자연재해의 규모가 달라도 인간과 자연과의 관계는 변하지 않는다. 대지진의 경험에서 우리가 배워야 할 것은 자연과의 관계를 재정립해야 한다는 것이다. 이 과정은 일본만의 경험이 아닌 인류가 체험한 지식으로서 넓게 공유되어야 할 것이다. 이러한 이유로 이번 심포지엄에서는 각국의 대표자들에 의해 인류의 발전사, 문명사에 공헌 가능한 ‘수난의 교훈과 지혜’로서 부각시킬 수 있는 주제가 선정되었다.

【기사집필: 왕 민
(호세이대학 국제일본학연구소 전임 연구소원, 교수)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成22年~平成26年)
 国際日本学の方法に基づく「〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来」
 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

東アジア文化研究会 特別研究会

変化の中の日本観—東アジア同志の対話—

●日 時：2012年3月21日(水) 9:00~12:00
 ●会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 国際日本学研究所セミナー室
 ●司 会：王 敏(法政大学国際日本学研究所教授)

研究アプローチ③は、3月21日(水)に「東アジア特別研究会」を開催した。ここで前日、3月20日(火)の国際シンポジウム「震災後のいま問いかける」で発表を担当された米国、中国、韓国出身の先生方をお招きして、「変化の中の日本観」について意見交換を行った。なお、前日のシンポジウムは、東日本大震災と原子力発電所事故を経験した私達にとって、自然の一部であると同時に、自然に働きかける存在である人間とは何か、をテーマとして、地域文化と宮沢賢治を軸として対話を行う企画であった。

特別研究会の参加者は金容煥(韓国倫理教育学会会長、忠北大学校教授)、張怡香(世界医学院院長・教授)、賈蕙萱(元北京大学教授)、雷剛(重慶出版社編集部)の四氏であり、研究会は非公開の形式で行われた。司会の王敏教授は四氏に対して以下の3つの問を提起した。

1. シンポジウムに関して感じたこと。
2. 日本は、GDPが下がる中で、東日本大震災を経験して変化した。日本が変化したことで、諸外国の日本を見る目は変わったと思われる。四氏の居住するそれぞれの地域において、日本のイメージ、日本についての意識はどのように変わったか。
3. 日本と交流していくうえで、さらにはまたグローバル化の中で、米、中、韓、日が交流していくうえで、留意すべきこととは何か。

シンポジウムに関する感想としては、四氏とも、それぞれの報告が内容豊富で質も高く、綿密に準備されたシンポジウムだったとして高い評価を与えられた。また、四氏は上記の質問に対して、次の通りの回答、意見を述べられた。

韓国の金氏は、倫理学者の立場から、シンポジウムで東アジア出身者の対話が成立したことについて高い評価を与えられた。また、宮沢賢治をあくまでも切り口として、そこから考えるべきことは生命共同体の構築という課題であること、これについて東アジア、米国を含めて公共責任が問われること、そこで、公共責任を共に担うなかで継続的な議論を行い、解決方法と乗り越えていく方法を考え、前向きかつ建設的な意見を提案する共同作業を進めていきたい、との見解を述べられた。

中国の賈氏は、東日本大震災は、将来中国に災難が起こった場合に、非常に参考になると指摘された。そして、シンポジウムの前後に見られた様々な活動を通して生れた「地震文化」に興味を持っているとしたうえで、今後地震災害があれば、それに対処する知恵は、より豊かになるだろうと述べられた。

米国の張氏は、様々な支援活動に参加しており、そ

のような支援を通して、日本に対する支援だけでなく、世界に向けて、さらには米国に対して人への関心、人への愛情という精神を伝えたいと強調された。

初めて日本を訪問された中国の雷氏は、東日本大震災の際に行われた写真探しの活動について見解を述べられた。こうした活動は四川省の地震の際には見られなかったとのことで、人の記憶の大切さにかんがみて、日本のそのような活動を高く評価していると述べられた。

王敏教授は、今回のシンポジウムを開催するにあたって、生命共同体を考え、一方では東アジアの対話を成立させようとしたのは、人々が生きている足元の大地をよくしたいと考えたからだとしたうえで、次のように総括した。

四川省の地震から連想されることは、シンポジウムの目的にも合致したものであった。日本を鏡として、互いに自分の地域を照らし合って持続的発展の可能な社会を作っていくという意見は、金氏が指摘する生命共同体の構築、これに関する公共責任という見解と同一であり、このような高い認識を四氏から得ることができたことに感動しており、企画者として十分な満足を感じている。

これに続いて、自由な雰囲気の中で、積極的な意見交換が展開された。最後に王教授が、当日の対話をまとめて、以下のような問題提起を行った。

- ・今回の東アジア出身者間の対話の中で、共通の認識として得られたことは、生命共同体の構築に関して共に考え、行動していきたいという志向であった。
- ・さらに共通の教養の基盤を作るために、共通の理念と認識が必要である。そのためには、金氏が作りたいたと発言しておられた、一度中止になった日・中・韓の哲学辞典の作成も必要であろう。この作業は今後、生命共同体の構築を進めていくために重要であり、核心的な点だと考えられる。
- ・また、教育への投資は重要であり、生命共同体を支えていく経済的な基盤にもなるであろう。
- ・金氏が目下構想中の東アジア間の対話が、この秋に韓国で開催されるならば、是非とも参加し、成功させたいと思っている。また、韓国での開催を受けて、更に中国、米国、日本で継続的に開催されるよう願っている。

今後、米国を含め、東アジア間で対話を継続し、生命共同体の構築に向けた活動をしていくことが必要であろう。

【記事執筆：金 英美(法政大学国際日本学研究所学術研究員)】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project: Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’ in East Asia”

East Asian Culture Research Meeting: Special Research Meeting

View of Japan under Change: Dialog between Fellow Thinkers in East Asia

Date: Wednesday, 21 March 2012, 9:00-12:00
 Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Hosei University Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
 Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The 4 participants of the special research meeting were Professor KIM Yong-hwan (Director, Korean Conference of Education in Logic, and Professor, Chungbuk National University), Professor CHANG Yi-hsiang (Director, World Medicine Institute), Professor JIA Huixuan (former Professor of Peking University) and Mr. LEI Gang (Editing Section, Chongqing Publishing Group), and the

战略研究基础形成支援项目研究方法③“‘对日认识’的现状——东亚地区为中心”

东亚文化研究会 特別研究会

变化中的日本认识—东亚各国间的对话—

日 期：2012年3月21日(星期三) 9:00-12:00
 会 場：法政大学市ヶ谷校区 58年館2層 国際日本学研究所講義室
 主 持：王 敏(法政大学国際日本学研究所教授)

此次特別研究会の来賓有金容煥(韓国倫理教育学会会長、忠北大学校教授)、張怡香(世界医学院院長 教授)、以及賈蕙萱(前北京大学教授)、雷剛(重慶出版社編集部)共4位，研究会以非公开形式进行。参会者高度评价了此次法政大学组织的国际学术会议，认为会中发表

전략적 연구기반 형성 지원사업 연구③ <일본의식>의 현재—동아시아를 기점으로

동아시아문화연구회 특별연구회

변화중의 일본관

—동아시아 동지의 대화—

일 시：2012년3월21일(수) 9:00~12:00
 장 소：호세이대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
 사 회：왕 민(호세이대학 국제일본학연구소 교수)

특별연구회에는 김용환(한국윤리교육학회 회장, 충북대학교 교수), 張怡香(장 이상·미국 중미연합대학 학장·교수), 賈蕙萱(귀 웨이완·전 베이징대학 교수), 雷剛(레이 강·중경출판사 편집부) 등 4명이 참가했으며 비공개로 진행됐다. 심포지엄의 감상에 대해서는, 발표자의 보고내용이 풍부하고 질도 높고 있으며, 면밀하게 준비된 심포지엄이었다는 평가를 받았다.

대지진 후, 일본에 대해서는 피해지역에서의 사진 찾아주기 활동이 주목을 받았고 사람의 기억을 소중히 한다는 점에서 높이 평가됐다. 또한, 일본의 ‘부흥문화’에 대해 연구하고 싶다는 의견도 있었다.

이번 동아시아 간 대화 중에서 공통적으로 인식한 것은 생명공동체의 구축에 관해 함께 생각하고 행동해 가야 한다는 것이었다. 구체적으로 공통의 교양 베이스 구축을 위해 한·중·일의 철학사전 제작이 제안되었다. 또

research meeting was conducted in private. Their thoughts on the symposium gave it a favourable evaluation: the presentations were abundant in content and high in quality, and the symposium was prepared meticulously.

Regarding post-earthquake Japan, they highlighted the action taking place of searching for photographs in the devastated areas, and praised this attempt to preserve people’s memories. A voice was also raised expressing the wish to research Japanese “revival culture”.

A common recognition in the conversation between the East Asians present on this occasion was the desire to think and act together over the building of a community of life. An actual proposal was made: the production of a dictionary of Japanese-Chinese-Korean philosophy in order to create a mutual cultural base. Investment in education was also emphasized.

It was hoped that the East Asian Conversation will be held this autumn in Korea, and then continue to be held in China, America and Japan.

Report by: KIM Young Mi (Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

的各报告的内容和质量均非常高，是一次经过精心准备的国际级会议。

对于东日本大地震，大家一致认为收集受灾地区照片作为尊重记忆的活动值得称道。还有人表示将对日本的“复兴文化”进行研究。

此次于东亚各国研究人员的对话中达成共识的观点是必须一起思考生命共同体的构造，并付之于行动。作为具体提案之一，可编著建立在共同教养之上的中日韩哲学辞典。增加在教育领域内的投资也被同时强调。

参会者认为，今后东亚各国间以及与美国的对话应该继续下去，关于生命共同体构建的实践活动也有必要进行展开。

【执笔者：金 英美(法政大学国際日本学研究所学術研究員)】

한, 교육에 대한 투자도 강조됐다. 동아시아 간의 대화 프로그램이 올 가을, 한국에서 개최되고 나아가 중국, 미국, 일본에서 지속적으로 개최되기를 바라는 목소리가 있었다.

【기사집필：김 영미(호세이대학 국제일본학연구소 학술연구원)】



司会：王敏 教授

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成22年~平成26年)
 国際日本学の方法に基づく「日本意識」の再検討—「日本意識」の過去・現在・未来—
 研究アプローチ①「日本意識」の変遷—古代から近世へ—

第8回研究会

薬品会から見える日本意識

- 報告者: 川崎 瑛子 (法政大学国際日本学研究所学術研究員)
- 日 時: 2012年1月21日(土) 13:30~16:00
- 会 場: 法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 国際日本学セミナー室
- 司 会: 田中 優子 (法政大学社会学部教授)

薬品会とは宝暦7(1757)年に田村藍水によって始められた会である。これは本草学者や医者、薬種商などが中心となって貴重な物や疑問のある物を全国から集め、それらの真贋を吟味し、情報交換を行う集まりであったとされている。従来の研究では薬品会によって藩を超えた学者同士の知的交流が活発になったとされており、それは「ネットワークの形成」という表現で語られることが多い。しかしこれは薬品会の開催によってもたらされた「結果」の一つに過ぎない。では薬品会の会場ではどのような意識が学者達の間で共有されており、如何なる場として薬品会は機能していたのだろうか。今回の研究会では「日本意識」という視点から薬品会の意義を見出していくことを目的とし、発表を行った。

宝暦12(1762)年に江戸湯島で開かれた薬品会では、主催者である平賀源内によって薬品会の開催と参加を案内した引き札が全国の関係者に回覧された。その引き札は江戸で開催される薬品会にもかわらず「大日本八神區奥域」という言葉から始まっている。外国の風土と日本を比較することで日本の深山幽谷が持つ神秘性が遭唐使の時代から至る歴史観と共に讃えられながら、日本に自生する本草が持っているであろう有益性を解明することこそ薬品会の目的だとされている。

本草学は格物究理を根本とする朱子学の影響を受けながら中国で発展し、江戸時代になって日本にも導入されたのちは享保の改革によって経験に基づいた実用的な学問として展開されていった。享保の改革では日本の自給率を向上させることを目的に全国の物産調査を行っており、そうした一連のプロジェクトの根幹となるのが本草学であり本草学者達であった。日本を背負って立つ学問としての地位を獲得するに伴い、中国由来の知識を抵抗なく日本の本草にも適用させてしまうことに警鐘が鳴らされるようになる。源内の師であり、薬品会の主催経験もある戸田旭山は、嘗て出版した『非薬撰』の中で自らの署名に「日本」という冠をつけている。旭山には自らが中国とは異なる文化と風土を持った場所で暮らす日本人であるという自意識があり、中国の知識に惑わされる

ことなく眼前に広がる現実の事物から日本を発見していこうとしていたのではないだろうか。

このような歴史の末に回覧された源内の引き札の文言は、古典の知識に固執することなく目の前の事実に従って対象の本質を明らかにする場所としての薬品会の実態を示唆し、日本の自給率を向上させる方法を生み出すことこそ本草学が目指すべき目標の一つであるとしていた本草学者達の使命感と知的好奇心を鼓舞するものであっただろう。「大日本」という言葉から始まる引き札によって結びつけられた学者達は、薬品会の会場で全国から集められた実際の物を見て、それらが自生している場所の風土は勿論、そこで暮らす人間の民俗と物の関係性に関する知識と情報を交換しあうことによって、日本とは決して単一の場ではなく、環境が異なれば自生する植物も異なり、その栽培方法もまた変わってくるなど、様々な要素が複合し合いながら構築されている場所であり国だという認識を育てていっただろう。質疑応答の場では、源内の引き札には日本に対する歴史観と実際の現在に基づいた国際意識が内包されており、開催案内に留まらない可能性が秘められているという議論ができ、薬品会の構成と実態に更に迫ることができた。

薬品会とは集められた物を鑑賞するだけの場ではなければ、物の良し悪しを決める品評会という評価に留められるべき会でもなかった。薬品会の会場では知識を持った人間達が物を媒介にして見聞を深め合い、会を終えた後には学者同士の地域を超えた交流が活発になっている。薬品会とは各々の学者が持っていた日本像が深化し、拡張されていく場であったと思われる。今後は薬品会の内部で渦を巻いていたであろう日本像と、薬品会によって本草学者やその近縁種の学者達が如何なる日本意識を持つようになったかを更に突き詰め、実証的に解明していくことにより、近世の日本意識が変化していく一例を報告していきたい。

【記事執筆: 川崎 瑛子 (法政大学国際日本学研究所学術研究員)】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project: Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

8th Research Meeting
 “Japan-consciousness Seen in *Yakuhin-e*”

Presenter: KAWASAKI Eiko (Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)
 Date: Saturday, 21 January 2012, 13:30-16:00
 Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Hosei University Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
 Chair: TANAKA Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

This research meeting aimed to reveal the significance, from the perspective of ‘Japan-consciousness’, of *Yakuhin-e* (“Pharmacopaeic Assemblies”, or “plant and animal expositions”) that were held during the Edo period. My

战略研究基础形成支援项目研究方法①“‘对日认识’ 的变迁——从古代到近代”

第1次研究会
 “‘药品会’中体现的日本认识”

报告人: 川崎 瑛子 (法政大学国際日本学研究所学術研究員)
 日 期: 2012年1月21日(星期六) 13:30-16:00
 会 場: 法政大学市ヶ谷校区 58年館2層 国際日本学研究所讲习室
 主 持: 田中 優子 (法政大学社会学部教授)

전략적 연구기반형성 지원사업 연구① <일본의식>의 변천—고대에서 근대로

제8회 연구회
 약품회에서 본 일본의식

보고자: 가와사키 에이코(川崎 瑛子, 호세이대학 국제일본학연구소 학술연구원)
 일 시: 2012년 1월 21일(토) 13:30~16:00
 장 소: 호세이(法政)대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학 세미나실
 사 회: 다나카 유코(田中 優子, 호세이대학 사회학부 교수)

이번 연구회에서는 <일본의식>이라는 시점에서 에도(江戸)시대에 개최된 약품회의 의의를 조명하는 것을 목적으로, 히라가 겐나이(平賀源内)가 출품자를 모으기

presentation focussed on the *hikifuda* (advertising handbills) that were circulated throughout Japan by Hiraga Gennai in order to gather exhibits. The conclusion became clear that *Yakuhin-e* were not just occasions for admiring collected items; neither did they stop at mere evaluation of the objects displayed. We discussed the historical value of Gennai’s handbills: this surpassed any value as advertisements, rather their value lay in their suggestion of the inner truth of the organisation and arrangement of *Yakuhin-e*, which revealed more than the primary purpose of these meetings. At the *Yakuhin-e* venue, specialists increased their knowledge through the objects on display, and after the event, lively exchange ensued between scholars that reached across regional boundaries. We can thus say that *Yakuhin-e* were responsible for deepening and broadening the image of Japan held by each of those scholars.

Report by: KAWASAKI Eiko (Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

此次研究会의 目的은 “日本认识”의 视角探求江戸时代的 “药品会”之意义。报告의 中心内容은 平賀源内为 征集商品而在全国巡展时使用的 广告海报。可以看出, “药品会” 既非对汇集作品进行鉴赏的场所, 也没有停留在对展品好坏做出评价。事实上, 源内的 广告海报的意义不仅限于 “药品会” 本身, 我们还可以从中对 “药品会” 的构成和实施方法做以管窥, 具有很高的史料价值。 “药品会” 的会场中, 具备专业知识的人们以物品为媒介相互加深见闻, 会后学者之间还展开超越地区的交流。由此可见, “药品会” 是各学者所持的 “日本镜像” 深化、扩张的场所。

【执笔者: 川崎 瑛子 (法政大学国際日本学研究所学術研究員)】

위해 전국에 돌린 광고지를 중심으로 발표했다. 그 결과, 약품회는 모여진 물건들을 감상하는 장소도 아니고 출품된 물건의 좋고 나쁨을 평가하는 품평회로 끝나는 것이 아니라는 것이 밝혀졌다. 겐나이의 광고지는 약품회의 목적만이 아닌, 약품회의 구성과 정리 등 내실을 알 수 있었다는 점에서 개권안내 이상의 사료적 가치가 있다는 것을 논의할 수 있었다. 약품회에서는 지식을 가진 사람들이 물건을 증개하고 서로 간에 견문을 넓혔으며 약품회가 끝난 후에는 학자들끼리 지역을 초월한 교류가 활발하게 이루어졌다. 약품회는 학자 각자가 가지고 있었던 일본상이 심화되고 확장되어 간 장(場)이라고 할 수 있을 것이다.

【기사집필: 가와사키 에이코 (호세이대학 국제일본학연구소 학술연구원)】



報告者 川崎 瑛子
 川崎 瑛子 氏



出席者の様子

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成22年~平成26年)
 国際日本学の方法に基づく「日本意識」の再検討—「日本意識」の過去・現在・未来—
 研究アプローチ①「日本意識」の変遷—古代から近世へ—

第1回研究会

「国家ノ生存競争」と「衆民政」
 ——小野塚喜平次の対外観と日本

- 報告者: 春名 展生 (中京大学・放送大学非常勤講師)
- 日 時: 2012年6月30日(土) 16:00~18:00
- 会 場: 法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 国際日本学セミナー室
- 司 会: 田中 優子 (法政大学社会学部教授)

吉野作造が「第一の恩人」と呼ぶ小野塚喜平次は、「衆民主義」の首唱者として、また「日本政治学史の源流」(田口富久治『日本政治学史の源流』)に位置する人物として知られる。しかし看過されがちなのは、小野塚が国際関係を学問的な考察の射程に取り込んだ点である。それは「国家学より政治学の独立」(巖山政道『日本における近代政治学の発達』)の一環をなすばかりか、「衆民政」を提唱する根拠にもなったと考えられる。本報告は、小野塚がどのように国際関係の制約と各国家の裁量を割り出したのかを探り、そこに一つの「日本意識」を見出す試みであった。

政府に早期の日露開戦を迫った「七博士」に加わった小野塚は、同志の戸水寛人らと同様に「過剰人口」のために「膨脹」を要する国として日本を描くが(「国家膨脹範囲ノ政治学的研究」)、このような発想には何か源泉が存在するのであるか。そのように問うと、小野塚が人口増加と農業不振を原因として大量の移民をアメリカに送り出したドイツの例を詳述し、また同じ頃に出版した『政治学大綱』の中で「政治学参考書」としてラッツェル著『政治地理学』(Ratzel, Politische Geographie, 1897)を挙げているのは示唆に富む。人口に応じて拡張する「生活圏」の概念を定礎した地理学者ラッツェルと同じく、小野塚は、マルサスの説を手がかりに「生存競争」の概念を編み出したダーウィンの生物学理論を人類に適用したのである。

進化論の受容をめぐるのは、それを頼みに自由民権運動を排撃した加藤弘之の言説ばかりが目立ってきたが、その加藤が将来的な「宇内統一国」の成立を期待しつつつけたように(たとえば『強者の権利の競争』)、そこから浮かび上がるのは進化を進歩と同一視したスペンサーの進化論である。それに引き比べ、社会の分野に持ち込まれたダーウィン進化論の展開については、これまで十分に顧みられていない。

ひとたび人口の増加に対応するために領土の拡張を試みる国が現れると、同じ条件にない国々をも巻き込んで「国家ノ生存競争」が誘発される。それに処するために小野塚は「外交政策ハ膨脹的ナルベシ」と主張するが、「膨脹政策」を追求するには官民の一体が望まれるゆえ、「衆民政」の追求や、ひいては「衆民政」の確立を勧説するに至る。このような発想は、小野塚を含めて「七博士」の面々が関与した社会政策学会に共有された「帝国主義と社会政策」(桑

田熊蔵「帝国主義と社会政策」、ただし桑田自身は同調せず)と通じる。小野塚の思想は一個人の特異な思いつきとしては片づけられまい。

このような苛烈な国際関係を前提に政治を説きながらも、小野塚自身は「国家競争力」の強化に特化した政治のあり方を「善政」とは考えず、そこから抜け出すために国際関係の転換を望んでいたふしがある。第一次大戦中にアメリカのウィルソン大統領が国際舞台に登場した際、小野塚は「国際的政治家」の構想に満腔の賛意を表するとともに、自らも「国際連盟ノ思潮ニ対シテ一層同情アル研究ヲ悉ス」(「戦後ノ国際連盟」)のために「国際政治学講座」の新設に動いた。

しかし大戦後の日本は失業、就職難、そして移民問題などにより、それまでになく「過剰人口」が強く意識された。1927年には内閣に「人口食糧問題調査会」が設置され、時代が下って満州国の承認に際しては、ときの陸軍次官が新国家は「国防上、資源上、人口問題上大なる貢献をなすに至る」(柳川平助「満蒙問題の再認識」)と論じている。つまり当時の日本では国際連盟を前提とした「国際政治」よりも「国家ノ生存競争」が国際関係の理論化として説得力を持ったであろう。とくに「十五年戦争」期に入ると、後者にまつわる小野塚の知見が実践に活きるようになる。

たとえば広田内閣で資源局長官に就任した松井春生は「小野塚先生の政治学」などが「後年私の「資源政策論」の骨子を成した」と戦後に回想している(「日本行政の回顧(その一)」)。おそらくラッツェルに触発されて1910年代より政治学の講義に取り入れられた「領土ノ政治的觀察」を松井は指しているであろう。また同じく小野塚の門弟で1920年代に『国際連盟政策論』を著した神川彦松は、満州事変後は「東亜新秩序」や「大東亜共栄圏」の構想を正当化する理論を發し続け、戦後間もなく出版した『国際政治学概論』には「国際政治進化の自然的根本動力は、政治集團の人口の増加である」と書き記している。あたかも小野塚の出発点に回帰した観がある。小野塚が日露戦争の頃に提起した「国家ノ生存競争」と「膨脹政策」は、意外なまでに息の長い「対外意識」および「日本意識」であったとは言えまいか。

【記事執筆: 春名 展生 (中京大学・放送大学非常勤講師)】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project: Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

1st Research Meeting of 2012

“Struggle for Existence by Nations” and “Democratic Governance”: Onoduka Kiheiji’s International View and Japan

Presenter: HARUNA Nobuo (Adjunct Lecturer, Chukyo University and the Open University of Japan)

Date: Saturday, 30 June 2012, 16:00-18:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Hosei University Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: TANAKA Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

Onoduka Kiheiji is known as the advocator of “democracy” who was named by Yoshino Sakuzo his “first benefactor”, and also as a political scholar who stood at the “headstream of Japanese political history”. This presenta-

战略研究基础形成支援项目研究方法①“‘对日认识’ 的变迁——从古代到近代”

第1次研究会

“国家的生存竞争”和“众民政”
 ——小野塚喜平次的对外认识及日本

报告人: 春名 展生 (中京大学・放送大学兼职讲师)

日 期: 2012年6月30日(星期六) 16:00-18:00

会 场: 法政大学市ヶ谷校区 58年館2层 国际日本学研究所讲习室

主持人: 田中 優子 (法政大学社会学部教授)

此次报告会旨在通过分析小野塚喜平次的外交思想, 探索其观点中的日本因素及日本认识的形式。众所周知,

전략적 연구기반형성 지원사업 연구① <일본의식>의 변천—고대에서 근대로

제1회 연구회

‘국가의 생존경쟁’ 과 ‘중민정’ —오노즈카 기헤이지의 대외관과 일본

보고자: 하루나 노부오(春名 展生, 主교(中京)대학·방송대학 비상근강사)

일 시: 2012년 6월 30일(토) 16:00~18:00

장 소: 호세이(法政)대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회: 다나카 유코(田中 優子, 호세이대학 사회학부 교수)

본 보고에서는 요시노 사쿠조(吉野作造)가 ‘최고의 은인’ 이라고 부르는 ‘중민주의’의 주창자로, 또한, ‘일본 정치학사의 원류’로 자리매김한 정치학자 오노즈카 기헤이지(小野塚喜平次)의 대외관에 대해 알아보고 그의 대외관 속에 나타난 일본의 위치와 그 속에 내재된 일본의식의 한 형태를 찾아냈다.

개체수 증가가 ‘생존경쟁’을 야기한다고 가정된 다윈의 진화론에 감화된 오노즈카는 ‘과잉인구’를 근거로 대륙진출을 지지하는 입장에서 러일전쟁 개전을 일본정부에 촉구했던 ‘일곱 박사’(七博士)에 가담함과 동시에, 장기적으로도 ‘국가의 생존경쟁’에서 살아남기에 필요한 거국일치를 실현하기 위해 ‘중민정’(衆民政) 확립을 권고했다. 그 구상은 동시대적으로는 ‘제국주의와 사회

tion investigated his international view, to find that his attitude towards Japan revealed a form of Japan-consciousness. Onoduka was inspired by Darwin’s theory of evolution that proposed that an excess of population would lead to a “struggle for existence”. He joined the group of “Seven Professors” in urging the government to commence the Russo-Japanese War, from the viewpoint of support for continental expansion on the grounds of “overpopulation”, as well as calling for the establishment of “democratic governance” in order to create the national unity required for long-term survival in the “struggle for existence by nations”. His ideas echoed the thought of the contemporary Society for Social Policy that pursued “imperialism and social policy”, and furthermore, through the mediation of his pupils, he contributed to the preparations for, and the justification of, the all-powerful war administration under the “Fifteen Year War”. In these respects and others, his influence can be considered great in both synchronic and diachronic terms.

Report by: HARUNA Nobuo (Adjunct Lecturer, Chukyo University and the Open University of Japan)

“众民主义”의倡导者小野塚喜平次被吉野作造称为“最大恩人”，同时也是被誉为“日本政治学史源流”的政治学者。小野塚被达尔文的进化论、即个体数量过剩将导致“生存竞争”的理论所感染，将“人口过剩”作为支撑日本进攻中国大陆的根据，加入了要求政府展开日俄战争的“七博士”行列，还积极主张确立“众民政”以支撑举国一致体制、最终在远期“国家的生存竞争”中保证日本生存。小野塚的这种构想与同时代出现的以“帝国主义及社会政策”为目标的社會政策學會思想产生共鸣。甚至通过他的众多学生为日本在“十五年战争”之下全力备战的正当化做出贡献。无论在当时还是后世均影响深远。

【执笔者: 春名 展生 (中京大学・放送大学兼职讲师)】

정책’을 추구한 사회정책학회의 사상에 동감하는 것이었으며, 더 나아가 제자들을 매개로 ‘15년 전쟁’ 하에서 총력전 체제 준비 및 정당화에 기여하는 등 공식적으로도 통시적으로도 영향을 적지 않았다고 생각된다.

【기사집필: 하루나 노부오 (주교(中京)대학·방송대학 비상근강사)】



左より 司会: 田中 優子 教授、春名 展生 氏

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成22年~平成26年)
 国際日本学の方法に基づく「〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来」
 研究アプローチ②「近代の〈日本意識〉の成立」

2012年度第1回研究会 日本民俗学・民族学の貢献

- 報告者: 竹田 旦(茨城大学名誉教授・創価大学名誉教授)
- 日 時: 2012年5月25日(金) 14:00~18:00
- 会 場: 法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー25階B会議室
- 司 会: ヨーゼフ・クライナー(法政大学国際日本学研究所兼任所員、国際戦略機構特別教授)

法政大学国際日本学研究所の「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来」プロジェクトのアプローチ②「近代の〈日本意識〉の成立」では、「日本民俗学・民族学の貢献」2012年度第1回研究会を5月25日午後2時から開催した。

講師として、茨城大学名誉教授・創価大学名誉教授の竹田旦先生をお迎えし、「旧東京教育大学における民俗学の研究と教育—史学方法論教室の誕生から終焉まで—」というテーマでご発表頂き、討論を行った。今年米寿となる竹田先生は、非常に熱のこもった3時間近くのお話の後、参加者からの1時間以上にわたる熱心な質問に答えて下さった。

竹田先生は、日本民俗学の生みの親である柳田國男に民俗学研究所で直接教えを受けた後、昭和27(1952)年に新制の東京教育大学に新しく設けられた「史学方法論」(略称:史法)研究室の助手として、のちに和歌森太郎教授とともに日本で初めての正式な専門教育科目である「民俗学概説」などを教えながら、国立大学として最も早い時期から日本民俗学専攻の学生を育成してきた。当時の教育大学の教授陣には、東洋史の直江廣治、非常勤講師で馬淵東一、白鳥芳郎、中根千枝、金子エリカなどの民族学ないし文化人類学の第一人者がおり、どこにもみられない両みんぞく学の共同の意識が教育の面でも研究の面でも非常にはっきり表れていた。研究の面では、昭和33(1958)年から毎年手がけた民俗総合調査という大規模な調査活動を開始し、『くにさき』(吉川弘文館、1960年)をはじめ、9冊の優れた報告書を世に出した。ただ、

その過程で、澁澤敬三の考えた九学会連合という共同の地域研究との良好な連携体制の反面、文化人類学との対立もあった。また、それを解消するにあたって、竹田先生から折口信夫先生、折口先生から柳田先生というルートをうまく活用した。もう一つの研究の分野では、昭和40(1965)年、東京教育大学民俗学研究室のなかに事務局を置く大塚民俗学会が発足し、機関誌として『民俗学評論』を定期的に発行、また長年にわたって大勢の執筆者の協力を得て『日本民俗事典』を編纂し、昭和47(1972)年によく出版した。

学生のなかには、早い時点から韓国の留学生も大勢いて、修士号や博士号を取得した台湾国籍や韓国国籍の修了生は、のちにそれぞれの国や地域で大活躍している。その延長として、韓国の民俗学会(現在の韓国民俗学会)と協力して、日韓共同調査を計画し実施した。特に竹田先生の韓国民俗学に関する優れた研究は最近まで続けられている。そういう意味で、柳田の伝統を受け継いだ一国民俗学を主張する研究者とはおおよそ違ったアジアの比較民俗の研究が東京教育大学で育てられた。

このような竹田先生のお話からは、本アプローチの「近代日本意識の成立における民俗学・民族学の貢献」というテーマに大きな、そして大変新鮮な刺激を頂いた。

【記事執筆: ヨーゼフ・クライナー
 (法政大学国際日本学研究所兼任所員・国際戦略機構特別教授)】



竹田 旦 茨城大学名誉教授



会場の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided)
 Project: Research Approach 2 “Establishment of Modern ‘Japan-consciousness’”

1st Research Meeting of 2012 “Contributions of Folklore Studies and Ethnology”

Presenter: TAKEDA Akira (Professor Emeritus, Ibaraki and Soka Universities)
 Date: Friday, 25 May 2012, 14:00-18:00
 Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25F Conference Room B
 Chair: Josef KREINER (Staff Member, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor and Special Adviser, Planning and Strategy Division)

Research Approach 2 held its research meeting, “Contributions of Folklore Studies and Ethnology”, on 25 May.

We welcomed Professor Takeda Akira, Professor Emeritus of Ibaraki University and Soka University, who spoke on the theme of “Research and Education in Folklore Studies at the former Tokyo University of Education: from the Start to the End of Classes in Historical Method-

战略研究基盤形成支援項目 研究方法② “近代‘対日認識’の形成” 特別研究会

2012年度第1次研究会

日本民俗学・民族学の貢献

報告者: 竹田 旦(茨城大学名誉教授・創価大学名誉教授)

日 期: 2012年5月25日(星期五) 14:00-18:00

会 場: 法政大学市ヶ谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会議室

主 持: Josef Kreiner(法政大学国際日本学研究所兼任所員、国際戦略機構特別教授)

法政大学国際日本学研究所の戦略研究基盤形成支援項目“用国際日本学の方法再討論—対日認識の過去、現在と未来” 研究方法② “近代‘対日認識’の形成” 特別研究会 “日本民俗学 民族学の貢献” 于5月25日顺利召开。

講師为茨城大学名誉教授、创价大学名誉教授、竹

전략적 연구기반형성 지원사업 연구② 근대 <일본의식>의 성립

2012년도 제1회 연구회

일본 민속학・민족학의 공헌

보고자: 다케다 아키라(竹田旦, 이바라키(茨城)대학 명예교수·소카(創価)대학 명예교수)

일 시: 2012년 5월 25일(금) 14:00~18:00

장 소: 호세이(法政)대학 이치가야 캠퍼스 보아소나드타워 25층 B회의실

사 회: 요셉 클라이너(호세이대학 국제일본학연구소 겸임 담당 연구소원, 국제전략기구 특별교수)

호세이대학 국제일본학연구소 프로젝트 ‘국제일본학의 연구방법에 입각한 <일본의식>의 재검토—<일본의식>의 과거·현재·미래의 연구② 근대 <일본의식>의 성립’에서는 5월 25일, ‘일본 민속학·민족학의 공헌’ 연구회를 개최했다.

강사로는 이바라키대학 명예교수이자 소카대학 명예교수인 다케다 아키라(竹田旦) 교수가 ‘구 동경교육대학의 민속학 연구와 교육—사학방법론 교실의 시작과 중

ology”

Professor Takeda studied under Yanagita Kunio at the Institute of Folklore Studies, and was the first to educate university students at a national university in Japanese folklore studies when the “Historical Methodology” Research Room, later the Folklore Studies Research Room, was newly established at Tokyo University of Education in 1952. Contemporary professors at the University of Education included leading scholars in the fields of ethnology and cultural anthropology, and a shared consciousness of folklore studies and ethnology - unseen elsewhere - was clearly expressed in both teaching and research.

Students included overseas students, many from Korea, and graduates were later active in their own countries and regions. Joint Japan-Korea research was carried out in collaboration with the Korean Conference for Folklore Studies. In its nurturing of research in comparative folklore in Asia, Tokyo University of Education’s activity differed from the scholarship that followed the Yanagita tradition of mono-national folklore studies.

Report by: Josef KREINER (Staff Member, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor and Special Adviser, Hosei University Planning and Strategy Division)

田旦先生。講座と討論の主題は“旧東京教育大学中の民俗学研究と教育—史学方法論教室の誕生と終結”。

竹田先生は民俗学研究所中師範から柳田國男、其後昭和27年創設の新制東京教育大学“史学方法論”研究室、及び民俗学研究室中日本民俗学专业学生の教育。当時の教育大学中、民族学及び文化人類学的第一人也在講台上教学、这在其他学校并不多见。这种对民族学的理解无论从教育领域还是研究领域都具有非常重要的意义。

学生中有很多韩国留学生，毕业生其后活跃在各国家和地区中。作为其延长线，该研究所还与韩国民族学会计划展开日韩共同调查。从这个意义上说，东京教育大学继承了柳田國男先生的传统，与主张一国民俗学的学者不同，将侧重点放在亚洲比较民俗学的研究之上。

【执笔者: Josef Kreiner
 (法政大学国際日本学研究所兼任所員・国際戦略機構特別教授)】

말’이라는 주제로 발표하고 토론하였다.

다케다 교수는 민속학연구소에서 야나기타 구니오(柳田國男)에게 가르침을 받고 쇼와 27년(1952) 신제도 하의 동경교육대학에 새롭게 설치된 ‘사학 방법론’ 연구실(현 민속학연구소)에서 국립대학 중에서는 가장 먼저 일본 민족학 전공 학생을 육성했다. 당시 교육대학의 교수진으로는 민족학 및 문화인류학의 일인자도 있었으며 다른 어디에서도 볼 수 없는 민속학과 민족학의 공통된 의식이 교육 면에서도 연구 면에서도 매우 명확하게 드러났다.

학생 중에는 일찍부터 한국 유학생도 많았으며, 졸업생은 훗날 각자의 나라와 지역에서 활약했다. 그 연장선에서 한국의 민속학회와 협력해 한일 공동조사를 계획하고 시행했다. 이러한 배경으로 동경교육대학에서는 야나기타의 전통을 계승한 일국민속학을 주장하는 연구자와는 달리, 아시아 비교 민속 연구자가 육성되었다.

【기사집필: 요셉 클라이너
 (호세이대학 국제일본학연구소 겸임 연구소원·국제전략기구특별교수)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成22年~平成26年)
 国際日本学の方法に基づく「〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来」
 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

2011年度第10回東アジア文化研究会

日本研究の可能性

—臧佩紅著『日本近現代教育史』を媒介に—

- 報告者：劉 迪(杏林大学総合政策学部准教授)
- 日 時：2012年1月11日(水) 18:00~20:00
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：王 敏(法政大学国際日本学研究所教授)

2012年1月11日、法政大学国際日本学研究所の主催により、「2011年度第10回東アジア文化研究会」が開催された。杏林大学総合政策学部准教授劉迪が「日本研究の可能性—臧佩紅著『日本近現代教育史』を媒介に」と題して報告を行った。報告者は同書について若干の考察を行ったうえで、中国における日本研究の在り方について提言を行った。以下は報告の要旨である。

1. 臧佩紅著『日本近現代教育史』について

臧著は中国の日本教育史研究分野において注目すべき成果である。著者は近代日本教育に及ぼされた政治の影響に重きを置いて分析を行っている。明治、昭和前半の教育史については、「軍国主義」と「皇国主義」という2つのキーワードをもって分析を展開、戦後については「民主化」「情報化」等の概念をもって日本教育の変容を考察している。近現代日本教育史を学習する者にとっても適した体系的な書物であるといえる。

2. 中国の日本研究の現状について

ここ30年来、日中貿易及び人的往来は飛躍的な発展を遂げた。同時に中国中央政府及び各レベルの地方政府が日本研究の強化に力を入れ、日本研究機関、研究者数、研究成果等も大幅に増加した。しかしこの間、日中両国の政治外交関係の発展は必ずしも良好とはいえなかった。このような背景のもとで中国の日本研究がどのような役割を果たしてきたか、またどのような日本認識の枠組を提供できるかが注目されている。

2000年代に入ってから日中関係におけるメディアの役割も増大してきた。インターネットの言論はギクシャクした日中関係に新しい変数をもたらし、中国指導部もこのような世論に配慮せざるをえなくなった。そのうえで体制外の日本研究者が既成の大衆メディア及びインターネットに登場し、世論に影響を与え始めている。これにより中国の政府系日本研究者の外交、社会への影響力が低下してきていることは明白な事実である。

3. 中国の日本研究の目的・方法について

日本研究の目的に関しては「他山の石」という言葉がしばしば使われる。今までの日本研究の一部にはこのようなプラグマツム的な側面が存在していることは事実である。日本に学べという願望は大変よいことであるが、多くの場合は、技術にしる、制度にしる、その所産の社会環境、文化から切り離し

ては成り立たない。この意味で日本研究には総合的なアプローチを導入することが必要とされている。

方法論の視点からみれば中国の日本研究にはドグマツム的な傾向が観察される。たとえば「一分為二」という方法である。研究対象を分析するに当たり、「良い部分」と「よくない部分」を単純に二分して断じることは思考を停止させることである。「一分為二」という方法論は現実社会の内実を見過ごす恐れがある。このような方法から脱却するためには、細部からの考察が重要となる。

中国の日本研究のなかで「大而化之」の問題がみられる。複雑な現実社会を研究する際に、その詳細なメカニズムを追及せずただ既成概念をもってきて適当に当てはめては真の事実には迫ることができない。「大而化之」の方法を捨て具体的な事実関係の考察を行うことが中国の日本研究の現状打開につながると思われる。

4. 日本研究の可能性について

報告者は中国の日本研究に対して「対話」「比較」「主体性」等諸方法の導入と強化を提言した。

- (1) 中国の日本研究者が「対話型」の研究を行う必要がある。中国文化・社会に立脚しながら日本文化・社会を観察し、両者の相違を見出す。その相違を認めつつ共通点を求める。この作業を繰り返す過程のなかでこそ彼れに関する認識が高まる。
- (2) 中国の日本研究者にとって「比較」の研究視野が求められている。日本のことはもちろん、世界各地の事情をもなるべく広くみたらうで、比較の視野をもって日本をみることは、日本研究の質を向上する有効な方法であると考えられる。
- (3) 日本研究には「2つの主体性」が必要とされる。一つは研究者の主体性、もう一つは被研究者の主体性である。地域研究を行う場合、政治制度・法律制度からのアプローチだけでなく、人間活動そのものに関する研究は欠かせない。法律・政策の解釈、運用が人間の活動である以上、人間と制度、人間と政策との関係の解明が不可欠なものになる。

2010年代に入った現在、中国の日本研究は大きな転機を迎えている。つまり「日本研究」は一部の「日本研究者」の専有分野から各研究分野にまで拡散しつつある。多くの異なる専門知識を有するエキスパートが各自固有の研究視野に立脚し日本の一部に絞って深く分析・考察を行っている。このような流れの

なかで今後、中国の「日本研究者」にとって如何に各自の研究領域の再確定をするか、アイデンティティの再確立を行うかが重大な試練となっていよう。

参考文献

- 1、中華日本学会・北京日本学研究中心監修『中国における日本研究(1999)』世界知識出版社、1999年4月

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project: Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’ in East Asia”

10th East Asian Culture Research Meeting of 2011
**Possibilities for Japanese Education:
 Zang Peihong’s History of Modern
 Japanese Education**

Presenter: LIU Di (Associate Professor, Kyorin University)
 Date: Wednesday, 11 January 2012, 18:00-20:00
 Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Hosei University Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
 Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

This book is a noteworthy achievement in the field of the history of Japanese education in China. The author conducts an analysis focussing on the influence that politics has exerted upon education about modern Japan. He develops analysis of the history of education in Meiji and early Showa using the two keywords, “militarism” and

战略研究基础形成支援项目研究方法③“‘日本意识’的现状—以东亚为中心”

2011年度 第10届东亚文化研究会

日本研究の可能性—以臧佩紅《日本近現代教育史》为线索

報告者：劉 迪(杏林大学総合政策学部准教授)
 日 期：2012年1月11日(星期三) 18:00-20:00
 会 場：法政大学市ヶ谷校区 58年館2層 国際日本学研究所講義室
 主 持：王 敏(法政大学国際日本学研究所教授)

本次報告分两个部分，第一部分，是关于臧佩紅氏著作内容的分析。臧氏继承了中国日本史研究界的传统，对日本近现代教育中存在的若干倾向展开了详细的考察。

전략적 연구기반형성 지원사업 연구③ <일본의식>의 현재—동아시아를 기점으로

2011년도 제10회 동아시아문화연구회

일본연구의 가능성
 —장페이홍(臧佩紅)저서 <일본 근
 현대 교육사>를 매개로

보고자: 류 디(劉迪, 교린(杏林)대학 종합정책학부 준교수)
 일 시: 2012년 1월 11일(수) 18:00~20:00
 장 소: 호세이(法政)대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
 사 회: 왕 민(王敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교수)

본 저서는 중국의 일본 교육사 연구분야에서 주목할 만한 성과이다. 저자는 근대 일본 교육에 미친 정치적 영향에 중점을 두고 분석했다. 메이지(明治, 1868-1912), 쇼와(昭和, 1926-1989) 전반의 교육사에 대해 저자는 ‘군국주의’와 ‘황국주의’라는 두 개의 키

- 2、中国的日本研究編集委員会監修『中国的日本研究(1997-2009)』中華日本学会・南開大学・国際交流基金刊行、2010年5月
- 3、王敏「日本研究の改革開放への長い道」王敏編著『〈意〉の文化と〈情〉の文化—中国における日本研究』中公叢書、2004年

【記事執筆：劉 迪(杏林大学総合政策学部准教授)】

“imperialism”, and considers changes in education about Japan in the post-war period through the concepts of “democratization” and “informatization”. It is a systematic book suitable for those studying the history of education about modern Japan.

I proposed the following observations regarding Japanese education in China. (1) There is a need for researchers of Japan in China to conduct conversational research. (2) Researchers of Japan in China require a “comparative” research focus. (3) Japanese research necessitates “two subjectivities”.

Now in the second decade of 21st century, Japanese research in China has reached a great turning point. That is to say, “Japanese research” continues to disseminate from a field dominated by “Japanese researchers” into individual research fields. Amidst this trend, the important test for the future will be how “Japanese researchers” in China re-determine each research domain and re-establish their identity.

Report by: LIU Di (Associate Professor, Kyorin University)

这部著作资料丰富，详略得当，对中国读者系统了解近代以来日本教育的发展过程不无裨益。

在第二部分，报告人对今后中国日本研究的方向提出几点建议。首先，报告人指出在中国日本研究的方法方面存在教条主义的倾向。其次，报告人提出日本研究应该重视的方法，提出日本研究者应与考察对象之间展开“对话”，而非单纯的史料陈列；日本研究不能孤立研究日本，必须导入“比较”的方法。日本研究人员不能仅知道日本，而且还应懂得中国、欧美以及其他国家。另外，报告人还指出，日本研究应对日本细节部分展开详尽的考察，避免“大而化之”的现象。此外，日本研究应坚持两个主体性，既有研究者的主体性，也要重视考察对象的主体性。

【执笔者：劉 迪(杏林大学総合政策学部准教授)】

위드로 분석을 전개하고, 태평양전쟁 후에 대해서는 ‘민주화’, ‘정보화’ 등의 개념으로 일본 교육의 변용을 고찰하고 있다. 근현대 일본 교육사를 공부하는 학습자에게 적절한 교재라고도 할 수 있다.

보고자는 중국의 일본연구에 대해 다음과 같이 제언했다. (1) 중국의 일본연구자는 ‘대화형’ 연구를 할 필요가 있다. (2) 중국의 일본연구자들에게 ‘비교’ 연구의 시각이 요구된다. (3) 일본연구는 ‘두 개의 주체성’을 필요로 한다.

2010년대에 들어선 현재, 중국의 일본연구는 큰 전환기를 맞이하고 있다. 즉 일부 ‘일본연구자’의 전유물이었던 ‘일본연구’는 여러 분야에까지 확산되고 있다. 이러한 조류 속에서 앞으로, 중국의 ‘일본연구자’에게는 어떻게 각자의 연구영역을 재설정하는가, 어떻게 아이덴티티를 재확립하는가가 중대한 시련이 될 것이다.

【기사집필: 류 디(교린(杏林)대학 종합정책학부 준교수)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
 国際日本学の方法に基づく「〈日本意識〉の再検討―〈日本意識〉の過去・現在・未来」
 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在―東アジアから」
 研究アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量―未来へ」

第 1 回東アジア文化研究会

“新世界の中心”としての上海 ―上海万博の中国館〈東方の冠〉を読む―

- 報告者：オーレリ・ネヴォ（フランス国立科学研究センター研究員）
- 日 時：2012 年 4 月 12 日（木）18:35～21:15
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所長、文学部教授）
- 挨拶：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

去る 2012 年 4 月 12 日（木）、18 時 35 分から 21 時 15 分にかけて、法政大学国際日本学研究所セミナー室において、法政大学国際日本学研究所（HIJAS）の「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討―〈日本意識〉の過去・現在・未来」プロジェクト・アプローチ③「〈日本意識〉の現在―東アジアから」の 2012 年度第 1 回東アジア文化研究会が開催された。東アジア文化研究会は、2006 年の発足以来、60 回を超える研究会を開催している。今回は、ヨーロッパの研究者の視点を取り入れ、HIJAS のプロジェクト・アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量―未来へ」との共催による研究会を行った。

今回は、フランス国立科学研究センター研究員で民族学者のオーレリ・ネヴォ（Aurélie Névo）氏を迎え、「新世界の中心」としての上海―上海万博の中国館〈東方の冠〉を読む」と題して行われた。講演ではフランス語が用いられ、司会は HIJAS 所長で法政大学文学部の安孫子信教授、通訳は法政大学講師の杉本隆司氏が務めた。

ネヴォ氏は 1998 年以来雲南省での調査に従事しており、2008 年には *Comme le sel, je suis le cours de l'eau: Le chamanisme à écriture des Yi du Yunnan* (Société d'ethnologie) を上梓するなど、雲南省の少数民族であるイ族のシャーマニズムの専門家として活動している。

今回の報告の主眼は、2010 年 5 月 1 日から 10 月 31 日にかけて開催された上海国際博覧会（上海万博）に出展した、「東方の冠」という別称を持つ中国館を対象に、その文化的、象徴的な意味を解釈することであった。報告の概要は以下の通りである。

「万博史上最も費用をかけたパビリオン」とも呼ばれた中国館「東方の冠」は、4 つの柱によって「冠」の部分が支えられ、56 カ所の張り出しを持ち、北京の故宮に彩色されている赤色を参考にした「中国紅」と呼ばれる色が塗られた建物であり、中国の文化的、思想的な伝統を体現している。

上海万博の主題は「より良い都市、より良い生活」であり、現代の普遍的な課題というべき環境問題に積極的に取り組むことで、中国は上海万博の持つ意義を示しているように思われる。そして、「東方の冠」が象徴する中国の伝統的な思想とは、儒教を中心とした体系である。中国館の標語は『論語』「子路」篇

に見える「和而不同」（和して同ぜず）であり、これは、「中国は伝統的な思想を活かして現代の課題に取り組む」という姿勢を示すだけでなく、自らの文化的、文明的な立場をも明らかにしようとしていることを示唆している。すなわち、中国は、「東方の冠」を通して、「新しい時代の世界の中心の一つ」になる用意のあることを言外に示していると思われる。さらに、中国国内に目を向けると、経済の中心ではあるものの政治的、文化的な首都である北京に比べて相対的に低い地位に置かれていたと思われる上海は、「東方の冠」を擁することによって、観念的にはあるもののこれまで以上に高い地位を得ることに成功したと言えよう。

一方、設計を統括した何鏡堂が「それ自体が謎であり、様々な解釈を許す」と評した「東方の冠」の構造に目を向けると、われわれはいくつかの特徴的な要素を認めることができる。すなわち、文化的要素を建物の内部に秘める、という方針で設計された「東方の冠」は、「西洋による位置付けを東洋が受け入れる」という意味でのオリエンタリズムではなく、「東洋自身が東洋の位置付けを決める」という「新オリエンタリズム」と言うべき性格を持っている。

「新オリエンタリズム」がいかなるものであるかという点については、次のような事項が参考になる。例えば、中国館の「館」（guan）の声調は第三声であり、「東方の冠」の「冠」（guan）の声調は第一声である。これは、中国語の声調である四声の使い分けによって、guan という字に多様な意味を込め、われわれが「中国館こそ東方の冠である」といった意図を読み取ることを可能にしている。また、「以東方为视角」（東方を以て視角と為す）という「東方の冠」の性格は、「中国を代表とする東方がそれ以外の地域に自らの価値を伝える」ことをも含意している。しかも、「東」は、上海万博によって単なる地理的な概念に止まらず、「上昇」や「新生」あるいは「新しい力の誕生」の意味を与えられることになったため、そのような「東」あるいは「東方」は「今後の世界を担う、伸びゆく地域」となったと言える。そして、アヘン戦争によって西洋諸国の租界となった上海が、世界の新しい中心となって人々の注目を集めることは、「中国の復活」を象徴する出来事であると考えられる。

また、「東方の冠」の構造そのものに目を向けると、古代から権力の象徴として重視されてきた鼎を模し

た「冠」部分は天を、その土台部分は地を表しており、これによって天地合一を示している。ここでいう天地合一は、政治と文化、現在と過去といった異なる要素の合一と同一を表現している。さらに、「東方の冠」の屋上部分は 9 つの格子からなる九宮格になっており、その中心は、古代中国の帝王が国家の全ての重要な営みを行った場所である明堂の象徴である。このような特徴を持つ「東方の冠」は、構造の面からも、「世界の中心となる建物」という性格を備えていることが推察される。

これに加えて、故宮で利用されている、7 種類の赤色から構成される赤を手本にした「中国紅」は、「一つの全体を表すために様々な色を用いる」という態度の具体化であり、「和而不同」の観点に基づくと言えるだろう。

このように、「東方の冠」は、単なる万博のパビリオンの一つではなく、中国の伝統的な思想や文化、価値観、普遍性を表現し、世界に対して中国が自らの立場を示した建物である。また、19 世紀から 20 世

紀にかけて植民地であった上海という都市が、21 世紀の現在、外国ではなく中国自身の手によって「新しい世界の中心」という性格を付与されたことは、「東方の冠」から「新たな世界の秩序」が生まれる可能性を予想させるものである。

「現在の中国が世界をどのように位置付けるか」という点を「東方の冠」の象徴的、文化的な要素の解釈を通して考察した今回のネヴォ氏の発表では、文化的な表象を分析の手法として用いることを得意とするフランス文化人類学の特徴が遺憾なく発揮されたと言えよう。このような実験的、意欲的な取り組みがなされ、フランス語、中国語、日本語という 3 種類の言語を媒介として参加者が意見を交換したことは、国際日本学研究の方法と可能性に新しい側面を付加した点で、意義のあることであると考えられた。

【記事執筆：鈴木 裕輔
 （法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）】



王敏教授



左から 司会：安孫子信 所長（教授）、
 通訳：杉本隆司氏、オーレリ・ネヴォ氏



発表の様子



会場の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project: Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

1st East Asian Culture Research Meeting of 2012 “Shanghai as Centre of the New World: ‘Crown of the East’ China Pavilion at the Shanghai Expo”

Presenter: Aurélie Névtot (Le Centre national de la recherche scientifique, France)
Date: Thursday, 12 April 2012, 18:35-21:15
Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Hosei University Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
Chair: ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Literature)
Greeting: WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The 1st East Asian Culture Research Meeting of 2012 welcomed anthropologist and researcher at Le Centre national de la recherche scientifique, Aurélie Névtot, who

战略研究基础形成支援项目研究方法③ “‘日本意识’的现状——以东亚为中心”

第1次 东亚文化研究会

“上海、‘新世界的中心’——读解上海世博会中国馆<东方之冠>”

報告者: Aurélie Névtot(法国国立科学研究中心研究员)
日期: 2012年4月12日(星期四) 18:35-21:15
会场: 法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室
主持: 安孙子 信(法政大学国际日本学研究所所长、文学部教授)
致辞: 王 敏(法政大学国际日本学研究所教授)
2012年度第1次东亚文化研究会迎来了法国国立科学

전략적 연구기반형성 지원사업 연구③ <일본의식>의 현재—동아시아를 기점으로

제1회 연구회

‘신세계의 중심’ 으로서의 상하이—상하이 국제박람회 중국관 ‘동방지관’ 을 읽다.

보고자: 오엘르 네보(Aurélie Névtot, 프랑스 국립과학 연구센터 연구원)
일시: 2012년 4월 12일(목) 18:35~21:15
회장: 호세이(法政)대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
사회: 아비코 신(安孫子信, 호세이대학 국제일본학 연구소 소장, 문학부 교수)
인사: 왕 민(王敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교수)
2012년도 제1회 동아시아문화연구회는 프랑스 국립과학 연구센터 연구원이며 민족학자인 오엘르 네보 씨를 맞이하여 “‘신세계의 중심’ 으로서의 상하이—상하이 국제박람회 중국관 ‘동방지관’ 을 읽다” 라는 주제로 진

spoke on the subject of “Shanghai as Centre of the New World: ‘Crown of the East’ China Pavilion at the Shanghai Expo”. The lecture was conducted in French, with Professor Abiko Shin as Chair, and interpretation given by Dr. Sugimoto Tsuyoshi, Hosei University Lecturer. The lecture focussed on the “China Pavilion”, or “Crown of the East” that was exhibited at the Shanghai International Exposition held in 2010, and commented on its cultural and symbolic significance. It considered the point “how modern China is positioned in the world” through commentary on the symbolic and cultural elements of the ‘Crown of the East’. By using analysis of cultural symbols as its method, it displayed thoroughly the characteristics of French cultural anthropology. This was an experimental and ambitious approach that led participants to exchange opinions in French, Chinese and Japanese languages, and in this way, was significant in offering new aspects of method and potential to international Japanese studies.

Report by: SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

研究中心研究员、民族学者Aurelie Névtot. 她做了题为“上海、‘新世界的中心’——读解上海世博会中国馆<东方之冠>”的报告。讲座使用法语进行, HIJAS所长、法政大学文学部安孙子信教授主持, 翻译由法政大学讲师杉本隆司担任。此次报告的主要内容是对2010年上海世界博览会上展出的“东方之冠”、即中国馆的文化象征意义的解读。通过考察“东方之冠”象征性的文化要素揭示“当代中国在世界所处的位置”。此次发表将善用文化表象分析手法的法国文化人类学特征表现得淋漓尽致。同时, 此次研讨会的参加者们使用法、中、日3国语言交换意见, 这种试验性的积极尝试开拓了国际日本学研究方法新的可能性。从这个意义上研讨会也很具意义。

【执笔者: 铃村 裕辅 (法政大学国际日本学研究所客员学术研究员)】

행되었다. 강연은 프랑스어로 진행되었고, 사회는 국제일본학연구소 소장인 호세이대학 문학부 아비코 신 교수가, 통역은 호세이대학 강사인 스키모토 다카시 씨가 담당했다.

이번 보고의 주안점은 2010년에 개최된 상하이 국제박람회(상하이 엑스포)에 출전한 ‘동방지관’ (東方之冠)이라는 별칭을 가진 중국관을 대상으로 그 문화적, 상징적 의미를 해석하는 것이었다. ‘현재의 중국이 세계를 어떻게 평가하는가’ 를 ‘동방지관’ 의 상징적, 문화적 요소의 해석을 통해 고찰한 이번 발표에서는, 문화적 표상을 분석 방법으로 이용하는 것을 장점으로 하는 프랑스 문화인류학의 특징이 유감없이 발휘되었다. 이렇게 실험적이고 의욕적인 연구가 발표되고 프랑스어, 중국어, 일본어라는 세 언어를 매개로 참가자들의 의견 교환이 이루어진 것은 국제일본학 연구에 새로운 방법과 가능성을 더했다는 점에서 의의 있는 연구회였다고 생각된다.

【기사집필: 스즈무라 유스케 (호세이대학 국제일본학연구소 객원학술연구원)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成22年~平成26年)
国際日本学の方法に基づく「『日本意識』の再検討—『日本意識』の過去・現在・未来」
研究アプローチ③「『日本意識』の現在—東アジアから」

第2回東アジア文化研究会
長崎唐通事とその子孫

●報告者: 陳 東華(長崎中国交流史協会専務理事)
●日 時: 2012年5月30日(水) 18:30~20:30
●会 場: 法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 国際日本学研究所セミナー室
●司 会: 王 敏(法政大学国際日本学研究所教授)

近世の長崎は日本で唯一、中国・オランダとの貿易の窓口として繁栄を極めた。それを支えたのが唐通事と蘭通詞たちであった。彼らは長崎奉行所の地役人として通訳業務に携わるが、唐通事は貿易管理の職も担った。唐通事は基本的には、長崎在留の唐人(中国人)を起用し、その職は世襲とされた。貿易の拡大に伴い唐通事会所が設置されるが、その規模の大きさは世界的にも稀なものであった。唐通事のもう一つの大きな役割は、幕府にとって極めて重要な海外情報の収集で、彼らはその第一線で働いた。また、中国事情に通じた彼らは、長崎における中国文化の普及と定着の橋渡し役でもあった。やがて幕藩体制が崩壊すると通事制度も終結した。その後の新しい時代の波の中で、彼らの多くは持前の能力を生かして、外交、教育、経済などの分野に進出して活躍することになる。

(一) 江戸時代に活躍した唐通事

1604(慶長9)年、馮六(平野家の祖)が最初の唐通事に任命され、以後唐通事制度は1867(慶応3)年の解散まで263年間つづく。この間、唐通事は延べ1644人(実826人)を数えた。参考文献は林陸朗著『長崎唐通事』。

唐通事制度

- 1. 長崎奉行配下の地役人として、日清貿易の管理・通訳の仕事を担当
2. 1672(寛文12)年、大通事4人・小通事5人制となり、以後「訳司九家」として固定化
3. 1751(宝暦元)年、唐通事会所設置(現在の新興善小学校)
4. 通訳言語は主に南京語・福州語・漳泉語
5. 基本的に在宅唐人を採用、世襲制
6. 家筋約70家(宮田安著『唐通事家系論攷』に系図が紹介されている)
A 本通事(大通事・小通事・稽古通事).....約40家
B 唐年行司系(唐年行司・同見習).....約10家
C 内通事系(内通事・同小頭・唐船請人).....約20家

唐通事の任務

- 1. 唐人関係の通訳業務
2. 来航唐船の対応管理
3. 交易業務の管理
4. 唐人・唐館の秩序維持
5. 唐船風説(海外情報)の聴取・報告
6. 信牌(唐船の貿易許可書)の発給

唐通事の日本名

唐人が唐通事職に就くとき、日本名を名乗ることが求められた。多くは祖籍に因む地名をとって姓とした。たとえば、陳は潁川(えがわ)、劉は彭城(さかき)、俞は河間(かわま)、魏は鉅鹿(おうが)、徐は東海(とうかい)、張は清河(きよかわ)、高は渤海(ふかみ)というように。これらは、彼らが長崎に来る直前の福建や浙江などにはなく、それより遥か数百年前のルーツの地にあった地名である。彼らの心鏡を垣間見ることができる。ほかに、妻の姓を名乗った唐通事もいた。

(二) 長崎唐通事の子孫

慶応3年に唐通事制度が廃止された。73人の最後の唐通事たちの多くは明治新政府などに登用され、外交・教育・実業などの分野で活躍した。以下に盛山隆行氏の論文「幕末維新期の長崎唐通事」の一部を紹介する。

【外交】

- 鄭 永寧 (1829~1897) 第3代・第5代清国代理公使(特命全権大使相当)、外務省大書記官。
平井希昌 (1839~1896) 長崎裁判所通弁役頭取、清国派遣特命全権大使副島種臣附属随員、内閣賞勲局主事、米国派遣弁理公使。
穎川君平 (1852~1898) 米国ニューヨーク領事、大蔵省少書記官、神戸税関長、『訳司統譜』編纂発行者。
柳谷謙太郎 (1847~1923) 長崎府英語通弁役、横浜税関長、サンフランシスコ領事、外務省書記官、農商務省書記官、農商務省参事官、萬歳生命保険会社重役。
林道三郎 (1843~1873) 神奈川県典事、外務省初代香港副領事。
太田資政 (1835~1895) 清国派遣全権弁理大臣久保利通附属随員。
穎川重寛 (1831~1891) 外務省三等書記官、文部省外国語学校訓導、東京高等商業学校一等教授、外務省清国特命全権大使附属通訳官。
神代時次 (1831~1894) 第2代上海領事代任(領事相当)、東京外国語学校教授、長崎外国語学校教諭。
清河磯次郎 (1823~1900) 外務省上等訳官、長崎裁判所権中属、同訳官。
彭城邦貞 (1853~1914) 外務省漢語学官、陸軍省通訳官、台湾総督府通訳官。

- 【教育】
 鄭 幹輔 (1811 ~ 1860) 大通事、英語研究、通事仲間をつれて長崎港に停泊中の米国船を訪ね、英語を学ぶ。近代国家発展のための人材育成に貢献。
 吳 來安 (? ~ 1896) 外務省漢語学校教授、大阪裁判所嘱託、神道国学に精通し『古事記通玄解』等研究書を著す。後にこれら書物を一括して皇室へ献納。
 何 礼之 (1840 ~ 1923) 洋学者、大坂府立語学学校校長、岩倉遣外使節副使木戸孝允附属一等書記官、司法省高等法院予備裁判官、勅撰貴族院議員、『訳司統譜』序文撰書者。
 【実業・その他】
 陽 其二 (1838 ~ 1906) 我が国近代活版印刷術の開祖本木昌造と共に活版印刷事業展開、横浜毎日新聞社創設、王子製紙会社事業拡大

- に貢献、第一国立銀行嘱託、第2回・第3国内国勸業博覧会審査官。
 何 幸五 (1843 ~ 1908) 神奈川県上等通弁役、神奈川県書記官、工部省少書記官、日本鉄道会社創立時に貢献、九州鉄道会社経営。
 彭城貞徳 (1858 ~ 1939) 洋画家。

- (三) 唐通事関係の文献紹介 (一部)
 唐通事会所日録……………唐通事会所
 譯司統譜……………瀨川君平
 唐通事家系論攷……………宮田 安著 長崎文献社
 長崎唐通事 (増補版) ……林 陸朗著 長崎文献社
 維新の濤標—通事 平井希昌の生涯
 ……………平井 洋著 新人物往来社

【記事執筆：陳 東華 (長崎中国交流史協会専務理事)】



講義の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project: Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

**2nd East Asian Culture Research Meeting of 2012
 “Nagasaki Translators of Chinese and their Descendents”**

Presenter: CHEN Donghua (Representative Director, Association for Nagasaki-China History)
 Date: Wednesday, 30 May 2012, 18:30-20:30
 Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Hosei University Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
 Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

In early modern period Japan, Nagasaki was the only window for trade with China, Portugal and Holland, and as such, greatly prospered. It was sustained by its translators of Chinese and Dutch. They were employed in translation

as local staff of the Nagasaki Bugyo (magistrate’s office), but the *Totsuji*, translators of Chinese, also took on work managing trade. *Totsuji* started by hiring Chinese people resident in Nagasaki, and the post was hereditary. With expanding trade, this was systemized and a *Totsuji* Bureau was set up. The scale of the organization was unusually large even in worldwide terms. Another important role of *Totsuji* was in the collection of information from overseas vital to the Bakufu (government), as they were present and working on that frontline. Also, as they were familiar with matters pertaining to China, they acted as a bridge for the spread and reception of Chinese culture. When the Bakuhan administration eventually crumbled, so too did the *Totsu* system. However, riding the wave of a new era, many of those involved utilized their former skills to carve new roles, for example, in diplomatic, educational and economic fields.

Report by: CHEN Donghua (Representative Director, Association for Nagasaki-China History)

战略研究基础形成支援项目研究方法③ “‘对日认识’ 的现状——以东亚地区为中心”

第2次东亚文化研究会
“长崎唐通事及其子孙”

報告者：陳 東華 (長崎中国交流史協会専務理事)
 日 期：2012年5月30日 (星期三) 18:30-20:30
 会 場：法政大学市谷校区 58年館2层 国際日本学研究所講義室
 主 持：王 敏 (法政大学国際日本学研究所教授)

長崎は近代日本唯一与中国、葡萄牙、荷兰展开貿易の窓口、并因此获得繁荣。而支撑这繁荣的是“唐通事”

和“兰通词”。他们作为长崎奉行所的地方公职人员从事翻译工作。“唐通事”同时也兼任贸易管理之职。他们基本上均为在长崎当地的华人，职务世袭。随着贸易规模的扩大唐通事会所设立，其规模之大在世界范围内也不多见。第一线上展开活动的唐通事们有着另外一个作用，即对幕府而言极为重要的海外信息搜集。由于通晓中国国内情况，他们也起到了中国文化在长崎普及、扎根的作用。然而，随着幕藩体制走向灭亡、唐通事制度也因此终结。但是在新时代浪潮中，唐通事们大多运用自身的能力在外交、教育、经济等多领域内继续活跃，并发挥了新的作用。

【執筆者：陳 東華 (長崎中国交流史協会専務理事)】

전략적 연구기반형성 지원사업 연구③ <일본의식>의 현재—동아시아를 기점으로

제2회 동아시아문화연구회
나가사키의 당통사와 그 자손

보고자: 첸 동화(陳 東華, 나가사키(長崎) 중국교류사협회 전무이사)
 일 시: 2012년 5월 30일(수) 18:30~20:30
 장 소: 호세이(法政)대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
 사 회: 왕 민(王 敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교수)

근세 나가사키(長崎)는 일본에서 유일하게 중국과 포르투갈, 네덜란드와의 무역 창구로서 크게 번성했다. 이를 뒷받침한 것이 당통사(唐通事, 중국어 통역)와 난통사(蘭通詞, 네덜란드어 통역)들이었다. 그들은 나가사키 부교쇼(奉行所)의 지방 관리로 통역업무에 종사하지만,

당통사는 무역 관리직도 병행했다. 당통사는 기본적으로 나가사키에 체류하고 있는 중국사람을 기용하였고 그 직업은 세습되었다. 무역 확대와 함께 조직화돼, 당통사회관이 설치되었으며 그 규모의 크기는 세계적으로도 드물었다.

당통사의 또 다른 중요한 역할은 바쿠후(幕府)에게 있어 매우 중요한 해외정보 수집으로 그들은 제일선에서 활약했다. 또한, 중국 사정에 정통한 그들은 나가사키에 중국문화를 보급하고 정착시키는데 가교역할을 하기도 했다. 얼마 안 있어 바쿠한(幕藩)체제가 붕괴하자 당통사 제도도 종결되었다. 그러나 새로운 시대의 물결속에서 그들의 대부분은 타고난 능력을 살려 외교, 교육, 경제 분야에서 활약하는 등 새로운 역할을 담당하게 되었다.

【기사집필: 첸 동화 (나가사키 중국교류사협회 전무이사)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成22年~平成26年)
 国際日本学の方法に基づく「日本意識」の再検討ー「日本意識」の過去・現在・未来」
 研究アプローチ③「日本意識」の現在ー東アジアから」

第3回東アジア文化研究会

韓国語における中国語からの借用語と日本語の語彙の影響

- 報告者: オリヴィエ・バイブル (北京大学中国語学科博士研究員)
- 日 時: 2012年6月27日(水) 18:30~20:30
- 会 場: 法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会: 王 敏 (法政大学国際日本学研究所教授)

韓国語の語彙は、徐々に韓国語の必須の構成要素となった、様々な外来の要素によって特徴付けられている。数世紀にわたり、韓国は政治的にも文化的にも中国の文化的な影響下にあった。その結果、このような「外来語」の第一波はほとんど中国語であり、中国語の文字の使用によって現実化された。韓国語は独自の文字体系を欠いていたため、これらの文字は実際に韓国語の音韻を現すために用いられた。中国語は韓国語の語彙を豊かにすることを可能にし、従来韓国語が欠いていた多数の新しい言葉を韓国語にもたらした。やがて19世紀を通して、明治時代の日本語は、後に韓国と中国が借用することになる多数の新しい術語を作り出した。借用の第二段階は、米朝戦争(1950-53年)に国連軍側として介入した1950年代半ばに起きた。本発表の前半では、漢四郡時代から1960年代に北朝鮮の金日成による言語浄化政策までの、朝鮮半島における中国語の借用に関する主要な段階を検討した。後半では、現代の韓国語の中で、中国語起源の言葉がいかんして発展したかを理解することを可能にする中国の韓国語を共時的に分析した。語彙の分析、とりわけ対象となる地域での借用語の研究は、日本文化の影響と同様に、中国文化の影響の本質を観察することを可能にするのである。

新しい言葉を借用あるいは創造する環境に影響した事実を一言で述べるなら、社会の変化となる。科学と技術の発達、内的・外的な文化の交流、公共文化の発達は、社会の変化に通じる第一の要因である。科学の発達は特殊な術語を作り出し、他の文明は、こ

の文明を暗示する新しい術語を作る文化的な交流を通してもたらされるのである。今日、最も強い要因は公共文化の発達である。かつて、公共文化はジャーナリズムやマスメディアを通して広まった。しかしながら、最近では、多様なコミュニケーションへと通じる公共文化の生産者と消費者の間の境界を取り除くために、即席の言葉が作られ、広められていることに気付くのは容易である。韓国語学堂(KLI)は、『標準国語大辞典』に収められている、19世紀から現在までの韓国語の新語の調査を1994年に開始した。その後、調査は数段階を経ている。1994年と1995年の段階では、KLIは、意味や形態学的な構造を分析せず、新語の標本と語源を調査するだけであった。計画を一時中断した後、『標準国語大辞典』の出版後の2000年に調査を再開した。2005年には、2005年に生まれた新語を抽出して調べる作業を行った。その結果、報告書への記載が予想されていなかった言葉は除外されることになり、KLIは新語の用法を研究せず、それらの言葉を辞書プロジェクトチームに引き継いだのであった。それらの新語の中のいくつかはしばらくの間利用された後、消滅したか、他の言葉に取って代わられている。同じ期間に、KLIは、韓国語の語彙における英単語の影響を制限する目的で、「国語浄化」と呼ばれるプロジェクトを開始したのであった。

【記事執筆: オリヴィエ・バイブル (北京大学中国語学科博士研究員)
 日本語訳: 鈴木 裕輔 (法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】



左: 王雪萍氏(通訳)、右: オリヴィエ・バイブル氏



会場の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project: Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

3rd East Asian Culture Research Meeting
 “Chinese Loan Words in Korean Language and the Influence of the Japanese Lexicon”

Presenter: Olivier BAILBLE (Post-doctoral Researcher, Chinese Language Studies, Peking University)
 Date: Wednesday, 27 June 2012, 18:30-21:15
 Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Hosei University Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
 Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Korean lexicology is characterized by many foreign elements that have gradually become integral components of the language. For many centuries, Korea was politically and culturally subordinate to the cultural influence of China. As a consequence, the first wave of these “linguistic borrowings” was almost entirely Chinese and was realized through the use of Chinese written characters. These characters were actually used as a means to represent

Korean phonology, as the Korean language lacked its own writing system. Chinese characters were also the essential elements which permitted the enlargement of the Korean lexicography and brought to Korean a large quantity of new words which were lacking in the language. Later, during the 19th Century, the Japanese of the Meiji Period produced a large number of new terms which were then borrowed by both Korea and China. A second phase of borrowing began in the middle of the 1950s when the United States intervened on the side of the United Nations during the Korean War (1950-53). The first part of the present study examines the major phases of Chinese borrowings on the Korean peninsula, from the period of the four garrisons of the Han Dynasty in China until the language-cleansing policy conducted by Kim Il-Sŏng in North Korea during the 1960s. In the second part, this study will proceed to a synchronic analysis of Sino-Korean words which will allow us to understand how these words of Chinese origin have evolved in modern Korean. A lexical analysis, in particular a study of loan words by subject area, will allow us to observe the nature of Chinese cultural influences as well as Japanese influences.

Report by: Olivier BAILBLE (Post-doctoral Researcher, Chinese Language Studies, Peking University)

戦略研究基礎形成支援項目研究方法③ “対日認識”の現状ー以東アジア地区を中心”

第3次東アジア文化研究会

“韩语中来自中文的借用語及日语语言的影响”

報告者: Olivier BAILBLE (北京大学中国語学科博士研究員)
 日 期: 2012年6月27日(星期三) 18:30-20:30
 会 場: 法政大学市ヶ谷校区 58年館2層 国際日本学研究所講義室
 主 持: 王 敏 (法政大学国際日本学研究所教授)

韩语单词正在逐渐成为韩语最重要的构成要素，而其中包含诸多外来特征。几个世纪以来，韩国的政治和文化深受中国大陆影响。其结果是，韩语中“外来語”的

第一波单词几乎全部来自中文，且使用中国文字加以表述。由于韩语缺少独立的文字体系，这些文字实际上被用来表现韩语的音韻。中文让韩语单词变得更丰富，带给了韩语天然缺乏的众多新表现形式。而进入19世纪，明治时代的日语创造出了很多其后韩语与中文频繁借鉴的学术单词。朝鲜战争(1950-53年)后，美国为首的联合国军于1950年代后期则引发了第二阶段的语言吸收。此次发表的前半段中主要对汉四郡時代至1960年代北朝鮮金日成展开语言净化政策阶段期间内朝鮮半島对中文的借用进行了考察。而后半段则对中国国内存在的韩语进行了分析，因其存在现代韩语中起源于中文的单词才得以发展。对单词的分析，尤其是对指定对象地区借用語的研究也是考察日本文化影响、以及中国文化影响本质的方法。

【執筆者: Olivier BAILBLE (北京大学中国語学科博士研究員)】

전략적 연구기반형성 지원사업 연구③ <일본의식>의 현재ー동아시아를 기점으로

제3회 동아시아문화연구회

한국어의 중국어 차용과 일본어 어휘의 영향

보고자: 올리비에 바일블(베이징(北京)대학 중국어학과 박사 연구원)
 일 시: 2012년 6월 27일(수) 18:30~20:30
 장 소: 호세이(法政)대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
 사 회: 왕 민(王敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교수)

한국어 어휘는 서서히 한국어의 필수 구성요소가 된 다양한 외래적 요소에 의해 특징지어졌다. 수세기에 걸쳐 한국은 정치적으로도 문화적으로도 중국의 문화적 영향권에 있었다. 그 결과 이러한 외래어의 첫 번째 차용은 대부분 중국어였으며 중국어 문자를 사용함으로써 현실화되었다. 한국어는 독자적인 문자체계가 결여

돼 있었기 때문에 이러한 문자는 실제로 한국어 음운을 나타내기 위해 사용되었다. 중국어는 한국어의 어휘를 풍요롭게 했고 기존의 한국어에서 부족했던 많은 새로운 단어를 만들어 냈다. 또한, 19세기 메이지(明治)시대의 일본어는 훗날 한국과 중국이 차용하게 되는 다양하고 새로운 술어를 만들어 냈다. 외래어 차용의 제2단계는 한국전쟁(1950-1953)에 미국이 유엔 군칙을 개입시킨 1950년대 중반에 일어났다. 본 발표의 전반에는 한사군시대에서 1960년대 북한의 김일성에 의한 언어정화 정책까지 한반도의 중국어 차용에 관한 주요 단계를 검토한다. 후반에는 현대 한국어 중에 중국어가 기원인 단어가 어떻게 발전했는지 이해할 수 있도록 하는 중국의 한국어어를 공식적으로 분석한다. 어휘의 분석, 특히 대상이 되는 지역에서의 차용어 연구는 일본문화의 영향과 함께 중국문화 영향의 본질을 관찰하는 것을 가능하게 한다.

【기사집필: 올리비에 바일블 (베이징대학 중국어학과 박사 연구원)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
 国際日本学の方法に基づく「〈日本意識〉の再検討ー〈日本意識〉の過去・現在・未来」
 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在ー東アジアから」

第 4 回東アジア文化研究会

19 世紀における東アジア諸国の対外意識の比較

- 報告者：王 暁秋（北京大学歴史学部教授、中日関係史学会副会長）
- 日 時：2012 年 7 月 11 日（水） 18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25 階 B 会議室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

いわゆる対外意識とは世界情勢、国際関係、外国事情に対する観察・認識、及びそれに基づく判断・評価のことである。それは一国政府の外交方針（政策）や民衆の対外態度・行動のみならず、国内政策や変革方向の選択にも影響を及ぼしている。本発表では縦横比較の方法を駆使し、四つの段階に分けて 19 世紀における東アジア諸国の対外意識を考查、分析、比較した。

一、19 世紀初頭の華夷意識と鎖国

中国は東アジア文化圏の中心国であり、前秦代から華夷意識が次第に形成された。その中には、華夏中心の地理観と華夏中心の文化優越観が含まれている。それは儒学の「仁」、「義」、「礼儀」を価値標準とし、「内華外夷」、「貴華賤夷」、「華夷之弁」、「華をもって夷を變える」を価値目標とするものである。日本、朝鮮、ベトナムなどの諸国は東アジア文化圏の周辺に位置し、儒学の影響の下、それぞれに特有の華夷意識が生まれた。例えば、日本では、江戸時代に日本を中心とした華夷意識及び「華夷変体」の思想があった。朝鮮の李王朝では、統治者が朝鮮を「小中華」と認識していた。ベトナムの阮朝では、統治者がみずからを「南中華帝国」と称して、ベトナムを中心とする東南アジアの華夷秩序を構築した。

華夷意識が支配する中で、東アジア諸国では、19 世紀初頭にそのほとんどが鎖国という対外政策を打ち出したが、内容と重点にはそれぞれ多少の違いがあった。

二、1840 年代から 1850 年代にかけての危機意識と世界への開眼

1840 年代から 1850 年代、西洋列強の武力侵略によって東アジア諸国全体に危機意識が生まれた。これは、国家の存続が脅かされることによって生じた一種の不安感であり、東アジア諸国はようやく世界に目を開き、次第に新たな世界認識を確立していった。

中国では、アヘン戦争の刺激をうけて、少数の「士大夫」（上層知識人）のあいだで危機意識が生まれ始めた。彼らは目を開いて世界を見つめ、国際情勢を理解し、外国の地歴を研究し、アヘン戦争で敗北した教訓を総括しようとした。林則徐の『四洲志』や、魏源の『海国図志』等がその例である。彼らは西洋の進んだ軍事技術の学習を主張し、「夷の長技を師とし以て夷を制す」というスローガンを打ち出した。しかし、最高統治者である清朝皇帝と官僚貴族たちは和議を迷信し、目先の安逸をむさぼり、改革に着手しようと思わなかった。

日本は資源が比較的乏しい島国であり、その危機

意識は中国よりもいっそう敏感で強烈であった。中国で勃発したアヘン戦争は日本にさらなる警鐘を鳴らした。幕末日本の有識者は外国事情の把握と改革を求め、『海国図志』が日本に伝わった後、日本で刷られた刻印本は 20 種類以上にものぼった。朝鮮も外国の軍艦が侵入した際に危機意識が生まれたが、統治者はその「洋擾」が撃退されたのちには、進取の精神を失ってしまった。ベトナム・阮朝の明命帝も外国の情報を収集し、海防を固めようとした。

三、1860 年代から 1880 年代にかけての「洋務意識」と西洋への勉強

1860 年代以降、西洋の衝撃をうけて、東アジア諸国は西洋人を蔑視と教化の対象とする華夷意識から西洋列強を勉強と交渉の対象とする「洋務意識」に転換した。

中国は第二次アヘン戦争後、西洋に学ぼうとする「洋務運動」を開始した。西洋製の銃砲などを購入し、軍事工業を振興し、民間企業を奨励し、海軍を作ったり、外国に留学生を派遣した。これは中国近代化の始まりだが、封建的な頑迷勢力による強固な反対に遭い、妨害された。同時に「中体西用」という指導思想が改革の発展を大きく制約していた。

日本は開国して間もなく、積極的に西洋の軍事を学ぶ「幕藩改革」に着手した。明治維新後には、西洋資本主義の政治・経済・文化・教育制度を全方面から勉強し取り入れた。そして、「殖産興業」、「文明開化」と「富国強兵」という三つの政策を打ち出すことによって、資本主義近代国家への転換を基本的に完成した。

朝鮮は 1876 年に日本によって開国を迫られ、開化運動を開始した。急進派は日本の明治維新をまねて、日本に依存して開国を図ろうとしたが、温和開化派は中国の「洋務運動」をまね、「東道西器」を基本理念とした緩やかな改革を主張した。しかし、やはり開化運動は保守的な儒学者によって反対された。

四、1890 年代の競争意識と三つの道

1890 年代に入ると、東アジアの国際情勢は激動し大分裂を起こした。そして、東アジア三国は、様々な要因の下で、最終的に各々異なった道を進んだ。

1894 年から 1895 年にかけての日清戦争は、日中「洋務競争」の終着点と言えるだろう。中国は敗北によって、深刻な民族の危機に陥った。清朝の維新派は変法・維新によってのみ中国を救うことができると認識し、光緒皇帝を鼓舞して日本の明治維新を模範とした「戊戌維新」を行った。しかし、新旧勢力の差は歴然で、

やむなく失敗に帰し、清朝は自発的に変革する最後のチャンスを逃した。そして、中国は半植民地の深淵に陥ったのである。

一方、明治維新によって資本主義改革に成功した日本は、一步一步軍国主義の道を進んだ。同時に「脱亜入欧」という、西洋列強と共に東アジアの隣国を分割する発展方向を選択した。そして、日清戦争、日露戦争、韓国併合を相次いで起こし、ついにアジア唯一の帝国主義強国となった。

朝鮮でも各階級・派別が各々異なる対外意識を有して救国運動を指導した。東学農民戦争は、「逐滅倭夷」、「滅尽権貴」のスローガンを掲げるも、政府軍と日本軍に弾圧された。急進派は日本の支持の下、政変を發動して国王を軟禁し、閔妃を殺害して、民心を失った。1897 年に朝鮮は国号を大韓帝国に改めたが、主権の独立は守られなかった。そして、1910 年に「日韓併合条約」に調印し、完全に日本の植民地になった。

歴史的な啓発とは、世界の大勢と歴史潮流を明確に認識することが発展の方向を正確に選択する出発点であることである。外国に対する自大や自卑、あるいは盲目的排外や崇拜意識を克服し、独立、平等、友好、協力といった対外意識を確立しなければならない。そして、不断に改革・進歩し、向上すべく堅く決心しなければならない。外国勢力に依存した改革では、真の独立と進歩を獲得することはできない。一方、外国を侵略、抑圧することもまた真の自由と富強を得ることはできない。平和共存して、平等に互いの利益を促進する。交流と協力を強化し、共同発展を追求する。これこそが東アジアにおける国際関係の中で、唯一無二の正しい方向なのである。

【記事執筆：王 暁秋
 （北京大学歴史学部教授・中日関係史学会副会長）】



左から：王 敏 教授（司会）、張 玉萍 氏（通訳）、
 王 暁秋 教授（講師）



会場の様子



王 暁秋 教授



佐藤 保 氏（元お茶の水女子大学学長）

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project: Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’ in East Asia”

4th East Asian Culture Research Meeting

Comparison of International Consciousness in East Asian Countries of the 19th Century

Presenter: WANG Xiaohu (Professor, Department of History, Peking University; Deputy Director, History of China-Japan Relations Conference)
Date: Wednesday, 11 July 2012, 18:30-20:30
Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25F Conference Room B
Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

“International consciousness” means observation and acknowledgement of global situations, international relations and foreign affairs, as well as judgement and evaluation based on these. It exerts influence over a national government’s diplomatic strategy, as well as domestic policy and revolutionary direction. Here I consider, analyse and compare international consciousness in East Asian countries during the 19th century in 4 stages.

战略研究基础形成支援项目研究方法③ “‘对日认识’的现状——东亚地区为中心”

第4次东亚文化研究会

19世纪东亚各国对外意识的比较

报告者：王 晓秋（北京大学历史学教授 中日关系史学会副会长）

日期：2012年7月11日（星期三）18:30-20:30

会场：法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会议室

主持：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

所谓对外意识主要是指对世界形势、国际关系和外国形式的考察认识和判断评价。它不仅会影响一个政府的外交方针政策和对民众的对外态度行为，而且会影响这个国家内政的决策和变革方向道路的选择。

关于19世纪东亚各国对外意识的演变，可以分为以下

전략적 연구기반형성 지원사업 연구③ <일본의식>의 현재—동아시아를 기점으로

제4회 동아시아문화연구회

19세기 동아시아 각국의 대외의식 비교

보고자: 왕 샤오추(王 晓秋, 베이징(北京)대학 역사학부 교수, 중일관계사학회 부회장)

일시: 2012년 7월 11일(수) 18:30~20:30

장소: 호세이(法政)대학 이치가야 캠퍼스 보아소나드타워 25층 B회의실

사회: 왕 민(王 敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교수)

이른바 대외의식이란 세계정세, 국제관계, 외국사정에 대한 관찰·인식 및 그에 근거한 판단과 평가이다. 이는 한 나라 정부의 외교방침(정책)과 민중의 대외태도, 행동뿐만 아니라 국내정책과 변혁방향의 선택에도 영향을 미치고 있다. 발표에서는 수직·수평적인 비교방법을 이용해 19세기 동아시아 각국의 대외의식을 네 단계로 나누어 고찰, 조사, 분석, 비교하고자 한다.

19세기 동아시아 대외의식의 변천에 대해 다음과 같이 네 단계로 나누어 분석, 비교했다. 첫째는 19세기 화이(華夷)의식과 쇄국, 둘째는 19세기 40년대부터 50년

They are: 1) Anti-Chinese feeling and national isolation of early 19th century. 2) Sense of crisis during the 1840s and 50s. 3) “Consciousness of Western Affairs” during 1860s to 80s: the Western Affairs movement in China, Meiji Restoration in Japan, and the civilization movement in Korea. 4) Competitive consciousness of the 1890s: Chinese semi-colonisation, Japanese imperialism, and Korean colonisation.

Historical enlightenment begins with choosing the right direction for development, through clear understanding of world trends and historical currents. It necessitates an international consciousness of independence, equality, friendship and cooperation, without arrogance or humility, xenophobia or blind adoration towards other countries. This leads to continual reform and advancing prosperity. Reforms relying on foreign strength will achieve neither true independence nor progress, and invasion and suppression of foreign lands, neither true liberty nor wealth. Peaceful negotiation and promotion of equal advantages, and increased exchange and cooperation in pursuit of shared development: this is the only right direction within international relations in East Asia.

Report by: WANG Xiaohu (Professor, Department of History, Peking University; Deputy Director, History of China-Japan Relations Conference)

四个阶段加以分析和比较。一、19世纪初的华夷意识和闭关锁国。二、19世纪40-50年代的危机意识和开眼看世界。三、19世纪60-80年代的洋务意识和学习西方：中国洋务运动，日本明治维新，朝鲜开化运动。四、19世纪90年代的竞争意识和三条道路：中国半殖民地，日本帝国主义，朝鲜殖民地。

历史的启示，认清世界大势和历史潮流是正确选择发展方向的出发点。必须克服自大或自卑意识和盲目排外或崇洋意识，树立独立、平等、友好、合作的对外意识。依靠外国势力进行改革不可能取得真正的独立进步，而侵略压迫别国的国家也不可能获得真正的自由富强。只有和平共处、平等互利，加强交流合作、谋求共同发展才是东亚国际关系唯一正确方向。

【执笔者：王 晓秋

(中国北京大学历史学系教授，中国中日关系史学会副会长)】

대에 걸친 위기의식과 세계를 향한 개안(開眼), 셋째는 19세기 60년대부터 80년대의 ‘서양의식’ 과 서양에 대한 공부, 즉 중국의 양무운동, 일본의 메이지유신, 조선의 개화운동이다. 넷째는 19세기 90년대의 경쟁의식과 세 가지 노선, 즉 중국의 반식민지, 일본 제국주의, 조선 식민지다.

역사적 계몽이란, 세계적인 대세와 역사의 흐름을 명확하게 인식하는 것이 발전방향을 정확히 선택하는 출발점이 된다는 것, 바로 이것이다. 외국에 대한 자만과 열등감 및 맹목적 배타와 숭배의식을 극복하여 독립, 평등, 우호, 협력이라는 대외의식을 확립해야만 한다. 이를 바탕으로 끊임없이 개혁하고 진보하면서 부강을 도모해야 한다. 외세에 의존한 개혁으로는 진정한 독립과 발전을 획득할 수 없으며 외국을 침략, 억압하는 것 또한 진정한 자유와 부강을 얻을 수 없다. 평화적으로 교류하고 평등하게 서로의 이익을 증진하며 교류와 협력을 강화해 공동 발전을 추구하는 것, 이것이 동아시아의 국제관계 속에서 유일하게 명확한 방향이다.

【기사집필 : 왕 샤오추

(베이징대학 역사학부 교수, 중일관계사학회 부회장)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成22年~平成26年) 国際日本学の方法に基づく「日本意識」の再検討—「日本意識」の過去・現在・未来」 研究アプローチ④「日本意識」の三角測量—未来へ」

第4回勉強会

近代国家の構築

—アフリカの視点から、明治日本と現代アフリカとを、時代を跨いで比較する—

- 報告者：オーギュスタン・ロワダ (ワガドゥグ大学法学部教授)
- 日 時：2012年3月13日(火) 18:30~20:20
- 会 場：法政大学市谷キャンパス ボアソナード・タワー25階 B会議室
- 司 会：安孫子 信 (法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授)

去る3月13日(火)、18時30分から20時20分まで、法政大学市谷キャンパスのボアソナード・タワー25階B会議室において、法政大学国際日本学研究所の「国際日本学の方法に基づく「日本意識」の再検討—「日本意識」の過去・現在・未来」プロジェクト・アプローチ④「日本意識」の三角測量—未来へ」の2011年度第4回勉強会が開催された。今回は、ブルキナファソのワガドゥグ大学法学部教授であるオーギュスタン・ロワダ氏を迎え、「近代国家の構築—アフリカの視点から、明治日本と現代アフリカとを、時代を跨いで比較する—」と題して行われた。

ロワダ氏は2月1日から3月15日まで国際交流基金の招きで来日し、法政大学国際日本学研究所の外国人客員研究員として日本での調査と研究に従事した。今回、ロワダ氏は40日間の日本滞在で得られた知見をもとに報告を行った。

報告の概要は以下の通りである。

アフリカ諸国の多くは1960年代になって独立を果たし、近代化への発展を目指すことになった。しかしながら、経済的、社会的な発展という面では、大部分の国は近代化に成功したとはいえない。このとき、しばしば対比されるのが、第二次世界大戦後の日本を代表とするアジア諸国の経済的成功である。ただし、日本と対照する場合、戦後の経済成長だけでなく、近代化への道を本格的に歩み始めた明治時代に焦点を当てて、日本とアフリカ諸国の近代化への取り組みの類似点や相違点を検討することは、意義のあることといえる。そこで、今回は、日本とアフリカ諸国を、(1)近代化を進める過程の文脈、(2)近代化の担い手が果たした役割、(3)近代化における制度が果たした役割、の3点から比較した。

まず、近代化を進める過程については、(a)社会的文脈、(b)経済的文脈、(c)歴史的文脈、(d)政治的文脈、を対象として検討した。その結果、次の点を示した。日本はマイノリティを内部に抱えていたものの、基本的には社会、言語、宗教、人的資源という点で同質的であった。一方、アフリカ諸国は、これらの点に関しては基本的に多様であるという特徴を持っていた。経済的文脈では、日本は明治時代以前にプロト工業化が進んでいたのに対し、アフリカ諸国はプロト工業化の段階に達していなかった。歴史的文脈については、日本は江戸時代を通して対外的な接触が少なく、西洋列強による植民地化も経験しなかったが、アフリカ諸国と西洋列強との関係は暴力に依存しており、アフリカ諸国は西洋列強によって徐々に国力の弱体化を

余儀なくされた。政治的文脈に関しては、日本では、将軍を頂点とする武士階級による支配が確立されており、西洋列強の圧迫を受けたことで、支配者層が植民地化を避けるために西洋化を必要と見て「上からの改革」が進められたものの、アフリカ諸国の支配者層の多くは自らを民族として位置づけることができず、政治的な基盤も弱かったため、植民地化が容易に進んだ。

次に、近代化の担い手が果たした役割については、(a)エリート、(b)民衆、(c)民族アイデンティティ、の3項目を検討した。まず、エリートについては、日本では、エリートたちが進んで西洋を凌駕しようとし、その過程において徳川幕府の正統性を検討することになり、若い武士たちが西洋化の推進役となった。これに対し、植民地化以前のアフリカ諸国のエリートは、大部分がヨーロッパ諸国に対する劣等性を自覚せず、若者たちの動きも不活発であった。また、植民地化が進む際、エリートたちはヨーロッパ諸国に対抗するために近代化しようとはせず、ナショナリズムを高めようとした一部のエリートは、自国民からも植民地支配を行った国からも反発を受けたり、ナショナリズムを掲げながらも実際には自らの権益の拡大を目指したりしていた。民衆の役割については、日本では封建制の進展が権力による民衆の支配を正当化しており、アフリカ諸国では植民地化によって伝統的な支配制度が崩壊したことで権力による民衆の支配の正当性が確立されなかった。そして、民族アイデンティティについては、日本では調和と社会的な互惠を基礎とする価値観が近代化によって放棄されるのではなく、価値観そのものが近代化されることになったが、アフリカ諸国では、国家統合に関する主張は民族的な歴史と乖離しており、しかも支配者が自らの出身部族を優先しがちであり、近代化を阻害した。

近代化における制度が果たした役割については、(a)制度設計工学、(b)教育、(c)官僚制、を検討した。制度設計工学に関しては、日本はプロイセン、法律はフランス、海軍はイギリス、というように、制度に関する知識を一国から収集するのではなく、目的に合致し、対象となる分野で最も成功していると考えられた国から導入するという態度であった。これに対し、アフリカ諸国では一貫性のない制度が作られたり、地域的な特徴を考慮せずに旧宗主国の制度をそのまま引き継ぐということが一般的である。教育については、日本は、明治以前も歴史的に教育水準が高かったが、明治以降に高等教育の実施が加速化された。一方、アフリカ諸国ではいまだ教育が万人に普及しては

いない。官僚制は、日本では能力主義が前提となり、政治任用の余地が少ないことで、官僚組織の統一性を確保することができた。しかしながら、アフリカ諸国では、有力な政治家が行政を私物化することが珍しくなく、政治の行政化、行政の政治化が日常的であるため、官僚機構が政治から自立できないでいる。

以上のような検討から、日本が近代化を達成したのは決して奇跡の所産ではなく、狭隘な国土、過剰な人口、天然資源の欠乏といった、一見すると近代化を阻害するような要因に対して果敢に挑戦し、あるいはそのような要因を巧みに利用したことによって達成されたというべきである。日本に比べ、国土が広く、人口も過密ではなく、天然資源に恵まれたアフリカ諸国の多くは、民族的、言語的、社会的な多様性を近代化の原動力にできず、むしろ集団の統一化が阻まれている。

アフリカ諸国は、マックス・ウェーバー的な意味での官僚制の構築、能力主義の徹底、教育の民衆化、という点を日本から学び、近代化を推進する必要があるといえるだろう。

「多様性を保持しつつついに統一的な手法を用いて発展するか」というアフリカ諸国が抱える課題を解決するために明治時代の日本を参考として分析する試みは、実践的な日本研究であるばかりでなく、日本研究を通じた日本とアフリカ諸国の相互交流の可能性を含んでおり、有益であるといえよう。

【記事執筆：鈴木 裕輔
(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】



左：通訳 安孫子 悠氏 右：ロワダ 教授



司会：安孫子 信 所長 (教授)



オーギュスタン ロワダ 教授



会場の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project: Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”

4th Study Meeting

Building a Modern Nation: Transcending Eras in a Comparison of Meiji Japan and Present-day Africa from the African Viewpoint

Presenter: Augustin LOADA (Professor, Faculty of Law, University of Ougadougou)

Date: Tuesday, 13 March 2012, 18:30-20:20

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25F Conference Room B

Chair: ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Literature)

This occasion welcomed Professor Augustin Loada of the Faculty of Law, University of Ougadougou in Brukina Faso, who spoke on the title, “Building a Modern Nation: Transcending Eras in a Comparison of Meiji Japan and Present-day Africa from the African Viewpoint”.

The presentation undertook three comparisons between Japan and African countries: (1) context of the modernization process, (2) role of the bearer of modernization, and (3) role of the system in modernization. It became clear that Japan’s modernization was by no means a product of a miracle, but was achieved by challenging what might seem the obstacles to modernization – limited land space, excess population, lack of natural resources - and through skilful utilization of these obstacles. African countries, Professor Loada suggests, need to learn modernization from Japan as regard Max Weber bureaucratic structure, total merit system, and popularizing of education. Reference was made to Meiji era Japan for solving the problem faced by African countries, of “how to develop using universal methods whilst maintaining diversity”. This analysis attempt not only entailed practical research of Japan, but also revealed the possibilities of mutual exchange between Japan and African countries, and in this respect was most advantageous.

Report by: SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目 研究方法④ “对日意识” 的三角测量——面向未来

第4次学习会

近代国家の構築

—从非洲の立場对明治日本与现代非洲做跨时代比较—

報告者：Augustin Loada (瓦加杜古大学法学部教授)

日 期：2012年3月13日(星期二) 18:30-20:20

会 場：法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会议室

主 持：安孫子 信 (法政大学国際日本学研究所所长, 文学部教授)

此次研讨会邀请了布基纳法索的瓦加杜古大学法学部教授Augustin Loada, 做题为“近代国家の構築——从非洲の立場对明治日本与现代非洲作跨时代比较——”

的报告。该报告从(1)近代化的进程、(2)近代化中主要人物的作用、以及(3)近代化中制度的作用3点对明治日本与非洲各国做了比较研究。作为考察结论，即日本达成近代化绝非偶发的“奇迹”，是对国土狭窄、人口过剩、资源缺乏等阻碍发展之要素进行果敢挑战，或对其巧妙利用的结果。这一论证结果显示了Loada教授的如下观点，即非洲各国应该学习日本，建立起马克斯·韦伯式的官僚体制、实施彻底的能力主义和大众化教育，以此推动近代化的进程。“保持多样性的同时使用统一方式发展”以解决非洲各国面临的课题时，有必要参考明治时代的日本。这种研究和尝试不但是具有实践意义的日本学研究，同时也可拓展日本与非洲各国相互交流的可能性，非常有益。

【执笔者：鈴木 裕輔
(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】

전략적 연구기반형성 지원사업 연구④ <일본의식> 의 삼각측량—미래를 향해

제4회 연구회

근대 국가의 구축

—아프리카의 시점에서 본 메이지시대 일본과 현대 아프리카의 시대를 초월한 비교—

보고자: 오규스탄 로와다(와가도구대학 법학부 교수)

일 시: 2012년 3월 13일(화) 18:30~20:20

장 소: 호세이(法政)대학 이치가야 캠퍼스 보아소나드타워 25층 B회의실

사 회: 아비코 신(安孫子 信, 호세이대학 국제일본학 연구소 소장, 문학부 교수)

이번 연구회에는 부르키나파소의 와가도구대학 오규스탄 로와다 법학부 교수를 초청하여 ‘근대 국가의 구축—아프리카의 시점에서 본 메이지(明治)시대 일본과 현대 아프리카의 시대를 초월한 비교’ 라는 제목으로 진행되었다. 보고에서는 일본과 아프리카 각국을 (1) 근대화를 추진하는 과정의 문맥, (2) 근대화 담당자의 역할,

(3) 근대화에서 제도의 역할 등, 세 가지 관점에서 비교했다. 그 결과, 일본이 근대화를 달성한 것은 결코 기적의 소산이 아니라, 협소한 국토, 과도한 인구, 천연자원의 부족 등 언뜻 보면 근대화를 저해하는 요인에 과감하게 도전하고, 또는 이러한 요인들을 능숙하게 이용함으로써 달성했다는 것이 밝혀졌다. 아프리카의 여러 나라라는 막스 베버적인 의미에서 관료제를 구축하고 철저한 능력주의와 교육의 민중화를 일본에 배워 근대화를 추진해야 한다는 것이 로와다 씨의 견해였다.

아프리카 국가들이 안고 있는 ‘다양성을 유지하면서 어떻게 통일적인 방법을 이용해 발전하는가’ 라는 과제를 해결하기 위해, 메이지시대의 일본을 참고하여 분석한 시도는 실천적인 일본연구일 뿐만 아니라 일본연구를 통해 일본과 아프리카와의 상호교류 가능성을 내포하고 있어 유익한 보고였다.

【기사집필: 스즈무라 유스케
(호세이대학 국제일본학연구소 객원학술연구원)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成22年~平成26年)
国際日本学の方法に基づく「日本意識」の再検討—「日本意識」の過去・現在・未来」
研究アプローチ④「日本意識」の三角測量—未来へ」

第1回勉強会 歌でつなごう

—NHK 紅白歌合戦における国民の上演—

- 報告者: シェリー・ブランド (RMIT 大学専任講師)
- 日 時: 2012年7月5日(木) 18:30~20:40
- 会 場: 法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館 2階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会: 安孫子 信 (法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授)

去る2012年7月5日(木)、18時30分から20時40分にかけて、法政大学国際日本学研究所セミナー室において、法政大学国際日本学研究所(HIJAS)の「国際日本学の方法に基づく「日本意識」の再検討—「日本意識」の過去・現在・未来」プロジェクト・アプローチ④「日本意識」の三角測量—未来へ」の2012年度第1回勉強会が開催された。今回は、ロイヤルメルボルン工科大学専任講師のシェリー・ブランド氏を迎え、「歌でつなごう—NHK 紅白歌合戦における国民の上演—」と題して行われた。報告と質疑応答は英語で行われ、司会は HIJAS 所長で法政大学文学部の安孫子信教授、通訳は東京藝術大学のパット・サベジ氏が務めた。報告の概要は以下の通りである。

敗戦後の日本に文化的アイデンティティを確立しようと考えたプロデューサーの近藤積は、1945年12月31日にラジオ番組「紅白音楽試合」を制作した。セックス、スピード、スリルの「3つのS」を取り入れた番組作りを目指した近藤は、自身が愛好した剣道の紅白試合を手本に、男女が別の組に分かれて対抗するという形式を採用した。「紅白音楽試合」の放送は1945年の一回のみで終わったが、その後継番組として、1951年に男女対抗の形式を踏襲した「NHK 紅白歌合戦」(以下、紅白歌合戦)の放送が始まった。当初、紅白歌合戦は正月のラジオ番組として放送されたが、第4回(1953年)から放送日が大晦日に移行するとともにテレビ中継が始まり、第7回(1956年)からは東京宝塚劇場、第24回(1973年)からはNHKホールを舞台とし、現在に至っている。

紅白歌合戦は様々な角度からの分析と考察が可能である。そこで、今回は、「国民の形成」(Nation-building)、「うわべだけの親密さ」(Quasi-intimacy)、「パフォーマンスコミュニティ」(Performing Community)の3つの点を手掛かりにNHKが紅白歌合戦で用いている戦略を分析した。

まず、「国民の形成」とは、大晦日という日本にとって大きな意味を持つ日に、「日本のふるさと」、「日本の多様さ」を示す映像によって内部的なエキゾチシズムを醸成するとともに、「日本らしさ」をも強調し、結果的に、視聴者に「離れていても一緒にいる」という一体感、「自分は日本人の一人だ」と思わせる戦略である。

次に、「うわべだけの親密さ」とは、歌手と観客とを結びつけ、親しみの感情を抱かせるためにテレビやラジオでの放送が力を持っているものの、観客が歌手と間近に接することは例外的であるため、抱かれた親

しみの感情は仮想の域を出ない、ということを示す。しかし、その仮想的な親しみの感情こそが、紅白歌合戦の性格を規定しているともいえる。

第三の「パフォーマンスコミュニティ」とは、紅白歌合戦に毎年様々なコミュニティに属する歌手が出演する(performing)だけでなく、視聴者に「自分は国民の一人である」という感情を作り出させ、保持させ、それによって視聴者のアイデンティティの構築に働きかける(performing)という、紅白歌合戦の2つの戦略を表している。

このような3つの戦略は、美空ひばりとジェロという二人の歌手を通して具体的に理解される。すなわち、第5回(1954年)から第23回(1972年)まで連続出場し、各組の出場歌手の中で最後に歌唱する「トリ」を13回務めて「トリ」の重要性を確立するなど、美空ひばりは「紅白歌合戦の女王」ともいべき歌手であった。しかし、暴力団との交際を理由に第24回の出場を辞退して以来、NHKとの関係は冷却化した。だが、1989年に死去すると、没後5年(第45回[1994年])、17回忌(第56回[2005])といった年忌、第50回(1999年)といった紅白歌合戦の節目の年に美空ひばりの曲を出場歌手が歌い、NHKは美空ひばりが紅白歌合戦にとって特別な歌手であることを示している。さらに、第58回(2007年)には小椋桂が美空ひばりの合成画面とのデュエットにより「愛燦燦」を歌い、美空ひばりの神格化とNHKとの関係の完全な回復を印象付けた。このように、NHKは美空ひばりを過去の紅白歌合戦の栄光の象徴、あるいは大いなる遺産として最大限活用しているのである。

一方、2008年にデビュー1年目で紅白歌合戦に出場したジェロは、NHKの国際戦略と、紅白歌合戦が現在から未来へと生き延びるための戦略の一環として用いられている。すなわち、「米兵と結婚した祖母」と「紅白に出る、というおばあちゃんとの約束を果たした孫」というジェロと母方の祖母の関係を強調することで、NHKは演歌を「ふるさとのこころを表す歌」とし、紅白歌合戦に世代を超えた繋がりを提供する場という性格を与えようとしたのである。

以上のような分析から、例えば美空ひばりという故人の偶像化を進めることと、ジェロが象徴する「外国出身のスターの日本化」という戦略を進めることで、理想化された存在によって「理想化された日本」を視聴者にもたらし、「失われ、戻れない過去」や「なつかしいふるさと」といった要素と番組を結びつけることで、NHKは、紅白歌合戦を「ひとつの日本」を演出するための道具として用いているといえるだろう。

多くの日本人にとって当たり前ともいえる「大晦日に放映される紅白歌合戦」を対象に、そこに秘められたNHKの戦略を読み解く作業は、大衆文化の意味の再発見という域に止まらない、実験的な取り組みといえる。そして、こうした試みは、国際日本学という研

究の研究対象を広げるという点でも、意義のあることであると考えられた。

【記事執筆: 鈴木 裕輔
(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project: Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”.

1st Study Meeting ‘Let’s Connect Through Songs’: Performing the Nation in NHK’s *Kouhaku Utagassen*

Presenter: Shelley BRUNT (Lecturer, School of Media and Communication, Royal Melbourne Institute of Technology)

Date: Thursday, 5 July 2012, 18:30-20:40

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Hosei University Research Center for International Japanese Studies

Chair: ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Literature)

On this occasion we welcomed Lecturer at the School of Media and Communication of Royal Melbourne Institute of Technology, Shelley Brunt, who spoke on the title, ‘Let’s Connect Through Songs’: Performing the Nation in NHK’s *Kouhaku Utagassen*. The presentation and the question and answer session were conducted in English.

戦略研究基礎形成支援項目研究方法④“対日意識”の三角測量—面向未来

第1次学習会

歌声紐帯 —NHK 紅白歌合戦中の国民演出—

報告者: Sherry Brandt (RMIT大学専任講師)

日 期: 2012年7月5日(星期四) 18:30-20:40

会 場: 法政大学市ヶ谷校区 58年館2層 国際日本学研究所講義室

主 持: 安孫子 信 (法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授)

这次研究会中，墨尔本皇家理工大学专任讲师 Sherry Brandt 做了题为“歌声紐帯—NHK 紅白歌合戦中の国民演出”的报告。报告、答疑均使用英文。法政大

전략적 연구기반형성 지원사업 연구④ <일본의식>의 삼각측량—미래를 향해

제1회 연구회

노래로 하나 되자

—NHK 흥백가합전(紅白歌合戦)의 국민 상연

보고자: 셸리 브란트(RMIT대학 전임강사)

일 시: 2012년 7월 5일(목) 18:30~20:40

장 소: 호세이(法政)대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회: 아비코 신(安孫子 信, 호세이대학 국제일본학 연구소 소장, 문학부 교수)

이번 연구회는 로열 멜버른 공과대학 전임강사인 셸리 브란트 씨를 맞이해 ‘노래로 하나 되자—NHK 흥백가합전의 국민 상연’이라는 주제로 진행되었다. 보고와 질의응답은 영어로 진행되었으며 사회는 호세이대학 국제일본학연구소 소장인 아비코 신 교수가, 통역은 도쿄예술대학의 팻 사베지 씨가 맡았다. 이 보고에

Director of Hosei University Research Center for International Japanese Studies, Professor Abiko Shin was in the Chair, and interpretation was provided by Pat Savage of Tokyo University of the Arts. The presentation analyzed the strategy employed by NHK in *Kouhaku Utagassen* by referring to the 3 points: “Nation-building”, “Quasi-intimacy” and “Performing Community”. The resulting idealized creation brings to its viewers an “idealized Japan”, tying together concepts such as the “irretrievable past” and “nostalgic fatherland” with the television programme. It was suggested that in so doing NHK uses *Kouhaku Utagassen* as a tool for enacting a “united Japan”. This examination of NHK’s hidden strategy, within what is familiar to many Japanese as “The New Year’s Eve broadcast: *Kouhaku Utagassen*”, was an experimental task that went beyond the aim of a “rediscovery of hidden meaning within mass culture”. It was also significant in its attempt to broaden the research focus of research in international Japanese studies.

Report by: SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

학国際日本学研究所長安孫子信教授主持，東京芸術大学Pat Savage担任翻譯。此次報告分析了NHK形成紅白歌合戦の3点戦略，即“国民形成”(Nation-building)、“表面親密”(Quasi-intimacy)、“表現沟通”(Performing Community)。其結果，通过理想化的内容为观众呈现出了“理想化的日本”。“失去、无法回归的历史”和“让人怀念的家乡”等要素与节目的巧妙组合，NHK得以将紅白歌合戦变成演绎“统一日本”的道具。对于众多日本人而言理所当然“在年三十开幕的紅白歌合戦”其实隐藏着NHK的战略，通过对其解读可以重新发现“大众文化中蕴含的意义”，这是开创性的尝试。这一尝试有助于扩展国际日本学研究对象范围。就这一点而言，该研究具有深刻意义。

【執筆者: 鈴木 裕輔
(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】

서는 ‘국민의 형성’ (Nation-building), ‘허울뿐인 친밀감’ (Quasi-intimacy), ‘공연 커뮤니티’ (Performing Community) 등 세 가지 사항을 단서로 NHK가 흥백가합전에서 이용하고 있는 전략을 분석했다.

그 결과, 이상화된 존재에 의해 ‘이상화된 일본’의 이미지를 갖게 하고 ‘잃어버린, 돌아갈 수 없는 과거’와 ‘그리운 고향’이라는 요소를 방송 프로그램에 접목함으로써 NHK는, 흥백가합전을, ‘하나의 일본’을 연출하기 위한 도구로써 이용하고 있다는 것을 유추할 수 있다. 많은 일본인에게 당연하다고도 할 수 있는 ‘선달 그믐날 방영되는 흥백가합전’을 대상으로, 그 속에 감춰진 NHK의 전략을 알아내는 작업은 ‘대중문화 속에 감춰진 의미의 재발견’이라는 단계에 머물지 않는, 실험적인 연구였다. 그리고 이러한 시도는 국제일본학이라는 연구에서 연구대상을 확대한다는 점에서도 의의 있는 발표라고 생각된다.

【기사집필: 스텝무라 유스케
(호세이대학 국제일본학연구소 객원학술연구원)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく「〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来」
研究アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」

文部科学省「国際共同に基づく日本研究推進事業」（平成 22 年度）採択プロジェクト「欧州の博物館等保管の日本
仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」

第 2 回勉強会

ナールステック博物館（プラハ）の日本コレクション

—日本の伝統芸術に対する中央ヨーロッパの視点—

- 報告者：ヘレナ・ガウデコヴァ（ナールステック・アジア・アフリカ・アメリカ文化博物館学芸員）
- 日 時：2012 年 7 月 18 日（水）18：30～20：40
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

去る 2012 年 7 月 18 日（水）、18 時 30 分から 20 時 40 分にかけて、法政大学国際日本学研究所セミナー室において、「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来」アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」及び「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」プロジェクトの合同勉強会が開催された。今回は、ナールステック・アジア・アフリカ・アメリカ文化博物館学芸員のヘレナ・ガウデコヴァ氏を迎え、「ナールステック博物館（プラハ）の日本コレクション—日本の伝統芸術に対する中央ヨーロッパの視点」と題して行われた。報告と質疑応答は英語で行われ、司会は HIJAS 所長で法政大学文学部の安孫子信教授、通訳は HIJAS の鈴木裕輔が務めた。報告の概要は以下の通りである。

ナールステック博物館の名称は、創設者であるボイタ・ナールステック（1826-1894）の名にちなんでいる。ナールステックはウィーン大学で東洋学を学び、1848 年革命の余波を避けるため 10 年間渡米した後に帰国した。帰国後はチェコの社会の発展に尽力し、工業の近代化を目的として工業博物館を設立した。また、チェコの政治的、文化的な指導者たちの組織化を図り、自宅を会場とした懇親の集いを催した。ナールステックの自宅は、現在、ナールステック博物館の中心部として用いられている。1860 年代になるとナールステック夫妻はチェコの探検家や旅行家を積極的に支援するようになった。そして、探検家たちは、支援への返礼として、訪問先で入手した様々な品をナールステック夫妻に寄贈した。これらの寄贈品は、現在、博物館の所蔵品の中心を形成している。1880 年代にナールステックは自宅を改築し、工業製品や民族誌に関連する常設的な展示を行う三階建ての博物館とした。これが、ナールステック博物館の始まりであった。

現在、ナールステック博物館は正式名称をナールステック・アジア・アフリカ・アメリカ文化博物館といい、自然史博物館、歴史博物館、音楽博物館とともに、チェコの国立博物館の一つとなっている。博物館全体としては約 10 万点の所蔵品があり、プラハの本館に保管所と展示室を保有している。また、プラハ北郊 40km に位置するリビエホフ城にもアジア美術の常設展を行う別館を持っていた。しかし、2002 年の

エルベ川の大洪水の被害によって展示場所を失ったため、アジア美術の常設展を行えないでいる。アジア部門の収蔵品の数は約 4 万 8 千点であり、国別にみると日本が約 2 万点、中国が約 1 万 8 千点であり、残りはイスラムの装飾美術、韓国、インド、インドネシア、ベトナム、ラマ教の美術品となっている。

開館以来、多数のチェコ人がナールステック博物館に寄贈を行った。その中で最も重要な人物が、作家、旅行家、収集家であったジョー・ホロウハ（1881-1957）であった。ホロウハは 1906 年と 1926 年の 2 度にわたって来日し、大量の美術品を購入した。また、1908 年には、プラハで行われたオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世の即位 60 周年記念博覧会で日本の茶室を出展し、好評を博した。この成功により、ホロウハは著名な実業家で、後のチェコ大統領の祖父であるパーツラフ・ハベルの誘いを受け、プラハの中心部にあるルツェルナ宮殿に喫茶店「ヨコハマ」を出店した。「ヨコハマ」はチェコ人の女給が日本髪を結び、着物を着用し、壁には日本語で書かれた碑銘や飾りが置かれるなど幻想的ともいえる雰囲気を作り出し、利用客からも高く評価された。ホロウハは第 1 次世界大戦後に店を手放したが、「ヨコハマ」という名称と日本的な内装は 1924 年まで利用された。

ホロウハは 1924 年にプラハ郊外のロズトキーに別荘を購入し、建物を日本風に改築したほか、1924 年と 1925 年には日本の花見に倣った「花の祭典」を催した。特に 1925 年は、「花の祭典」の来場者のために、プラハとロズトキーの間を往復する特別列車と汽船が仕立てられるほどの人気であった。しかし、1926 年に日本を訪問するため、ホロウハは別荘を売却している。1926 年に来日したホロウハは多数の文物を購入し、帰国後の 1929 年にはプラハの見本市宮殿で厳選された所蔵品を公開した展覧会を行い、「日本美術の収集家」としての名声を不動のものとした。1955 年、ホロウハは全ての所蔵品を国有資産にすることでチェコスロバキア政府と合意し、所蔵品の目録を作成した。現在、ホロウハの所蔵品はナールステック博物館の日本コレクションの中心をなしている。

ところで、ナールステック博物館では、浮世絵、肉筆画、写真、紙細工といった美術品から、織物、民芸品、甲冑や刀剣、鏢、金物細工、陶磁器、木彫、根付、置物、印籠、玩具などを収蔵している。収蔵品の大部分は江戸時代に作られたものであり、刀剣につい

ては、制作が室町時代初期であることが確認されている古刀を所有している。

先年、ナールステック博物館は CD-ROM 形式の目録を刊行した。これは、目録の利用者に日本の芸術や生活様式、あるいは歴史に関する基本的な情報を提供し、日本の芸術と社会に関するより詳細な検討の結果を示すとともに、日本の美術に興味を持った人のために高解像度の画像を提供することを目的とした出版であった。

ナールステックは、19 世紀の日本をチェコの産業の近代化の手本と捉え、日本の工業製品の収集に努めた。その後、ホロウハのように日本の美術に崇拜的な感情を抱いたチェコの知識人たちの努力により、日本の美術品や芸術品が多数寄贈された。その結果、

ナールステック博物館は今日のヨーロッパにおいて最も豊かな日本コレクションを持つ博物館の一つとなっているのである。

今回の報告では、ナールステック博物館の来歴とそこに携わった人々の事跡を辿ることで、一つの博物館がいかんにして成り立ち、どのような目的と意図が存し、日本がどのように理解されていたのかが明らかにされた。これは、博物館という一つの場を対象にした、意義深い取り組みであると考えられた。

【記事執筆：鈴木 裕輔
（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）】



会場の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project: Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”.

MEXT/JSPS Joint International Project “Comprehensive Research of Japanese Buddhist Objects in European museums and their impact on the European image of Japan”

2nd Study Meeting

Japanese Collection of the Naprstek Museum, Prague: Central European View of Traditional Japanese Art

Presenter: Helena GAUDEKOVA (Curator, Naprstek Museum of Asian, African and American Cultures)

Date: Wednesday, 18 July 2012, 18:30-20:40

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Hosei University Research Center for International Japanese Studies

Chair: ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Literature)

We welcomed Ms Helena Gaudekova, Curator at the Naprstek Museum of Asian, African and American

战略研究基础形成支援项目研究方法④“对日意识”的三角测量——面向未来

国际合作推进日本研究项目“欧洲博物馆等所藏日本佛教美术资料全面调查，及以此展开的日本、日本观研究”

第2次学习会

纳普尔斯特克博物馆(布拉格)的日本藏品

—从中欧观点看日本传统艺术—

报告者: Helena Gaudekova (纳普尔斯特克亚洲、非洲、美洲文化博物馆研究员)

日期: 2012年7月18日(水) 18:30-20:40

会场: 法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室

主持: 安孙子 信 (法政大学国际日本学研究所所长、文学部教授)

전략적 연구기반형성 지원사업 연구④ <일본의식>의 삼각측량—미래를 향해

국제공동연구를 기반으로 한 일본연구 추진사업 ‘유럽의 박물관 등이 보관하고 있는 일본 불교미술 자료의 총조사와 이에 따른 일본 및 일본관 연구’ 프로젝트

제2회 연구회

나프르스테크 박물관 (프라하)의 일본 컬렉션

—일본 전통예술에 대한 중앙유럽의 관점—

보고자: 헬레나 가우데코바(나프르스테크 아시아·아프리카·미국문화 박물관 학예원)

일시: 2012년 7월 18일(수) 18:30~20:40

장소: 호세이(法政)대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사회: 아비코 신(安孫子 信, 호세이대학 국제일본학연구소 소장, 문학부 교수)

이번 연구회는 나프르스테크 아시아·아프리카·미국 문화 박물관 학예원인 헬레나 가우데코바 씨를 맞이하여 ‘나프르스테크(프라하)의 일본 컬렉션—일본의 전통

Cultures, who spoke on the “Japanese collection of the Naprstek Museum, Prague: Central European View of Traditional Japanese Art”. The presentation, as well as questions and answers, were conducted in English. Chair for the occasion was Professor Abiko Shin of the Faculty of Literature and Director of HIJAS, and interpretation was given by Suzumura Yusuke of HIJAS. After an overview of the history of the Naprstek Museum and of its founder, Vojta Naprstek, we heard the story of Joe Hloucha, collector as well as donator of the most important works in the Japanese collection of Naprstek Museum. We were then introduced to the museum’s Japanese collection, which included an explanation of the CD ROM-based catalogue published by the museum. Through tracing the lives of individuals linked to the story of Naprstek Museum, the presentation shone light on how the museum was established, how its aims and plans were formed, and how Japan was understood. Such a focus upon one museum location proved a very meaningful exercise.

Report by: SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

本次学习会邀请了纳普尔斯特克亚洲、非洲、美洲文化博物馆研究员Helena Gaudekova, 做题为“纳普尔斯特克博物馆(布拉格)的日本藏品——从中欧观点看日本传统艺术”的报告。报告及问答均使用英语, 由HIJAS所长、法政大学文学部安孙子信教授主持, HIJAS铃村裕辅担任翻译。此次报告中首先回顾了纳普尔斯特克博物馆的历史及创建者Vojta Naprstek的活动概况。介绍了纳普尔斯特克博物馆日本藏品最重要捐赠者、收藏家Joe Hloucha的事迹。其后, 分析博物馆内日本相关藏品内容的同时, 对该馆发行的CD-ROM形式目录也做以简要说明。此次报告通过追溯纳普尔斯特克博物馆的来历和相关人物的事迹, 探讨一座博物馆如何成立、因何种目的存在, 又是如何理解日本等问题。是以“博物馆”所为对象展开的、具深刻意义的研究尝试。

【执笔者: 铃村 裕辅 (法政大学国际日本学研究所客员学术研究员)】

예술에 대한 중앙 유럽의 관점’이라는 주제로 진행되었다. 보고와 질의응답은 영어로 진행되었으며 사회는 HIJAS 소장인 호세이대학 문학부 아비코 신 교수가, 통역은 HIJAS의 스텔라 유스케 씨가 담당했다. 보고에서는 나프르스테크 박물관의 역사와 설립자인 보이타 나프르스테크의 활동상황을 개관한 후, 수집가이자 나프르스테크 박물관 일본 컬렉션의 가장 중요한 기증자이기도 한 조 호로우하의 행적이 소개되었다. 그리고 박물관의 일본 컬렉션 내용 소개와 더불어 박물관이 간행한 CD-ROM 형식의 목록에 대한 설명도 있었다.

이번 보고에서는 나프르스테크박물관의 연혁과 그곳에 종사한 사람들의 행적을 알아봄으로써 하나의 박물관이 어떻게 세워졌고 어떤 목적과 의도가 있었으며, 일본이 어떻게 이해되었는지가 밝혀졌다. 이는 박물관이라는 하나의 장(場)을 대상으로 한 의미깊은 연구라고 생각된다.

【기사집필: 스텔라 유스케 (호세이대학 국제일본학연구소 객원학술 연구원)】

ブルキナファソ ワガドゥグ大学 로와다先生の研究所訪問

● 日 時: 2012年2月2日(木) 12:00~
● 場 所: 法政大学国際日本学研究所 (HIJAS)

西アフリカ、ブルキナファソの首都ワガドゥグにある国立ワガドゥグ大学法学部オーギュスタン・ロワダ教授が、2月2日に研究所を訪問された。ロワダ教授は国際交流基金の招きで、前日2月1日来日されていた。1カ月半の滞在中、客員研究員として本研究所を拠点として研究活動をされる予定で、当日はそれに先立って表敬訪問をして下さった。日

本における近代国家の誕生、明治維新が今回の研究テーマである。歓談では、ブルキナファソの今後の国造りに資するような研究成果をあげたいという抱負が語られた。

【記事執筆: 安孫子 信 (法政大学国際日本学研究所所長・教授)】

Visit to the Center by Professor Augustin LOADA of the University of Ougadougou, Brukina Faso

Presenter: Thursday, 2 February 2012, 12:00-
Venue: Hosei University Research Center for International Japanese Studies (HIJAS)

Professor Augustin Loada from the Faculty of Law, the State University of Ougadougou located in Ougadougou, the capital of Brukina Faso in West Africa, visited the Center on 2nd February. Professor Loada arrived in Ja-

pan the previous day, 1st February, on invitation from the Japan Foundation. He will stay for one and a half months, conducting research as a Visiting Researcher of the Center, and he honoured us with an advance visit. His research theme will be the birth of a modern state in Japan, and the Meiji Restoration. He talked about his wish to discover results that would benefit future nation-building in Brukina Faso.

Report by: ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor)

布基纳法索、瓦加杜古大学教授 Loada 访问本研究所

日 期: 2012年2月2日(星期四) 12:00-

会 场: 法政大学国际日本学研究所 (HIJAS)

位于西非布基纳法索国首都瓦加杜古的国立瓦加杜古大学法学部教授Augustin Loada于2月2日访问了本研究所。Loada教授是受国际交流基金的邀请于2月1日访问

日本的。在日本停留的1个月期间将作为客座研究员以本研究所为中心展开研究活动, 并于抵日当天首先访问了本所。其研究题目为日本近代国家的诞生与明治维新。谈话间他提到自己的抱负, 称希望能做出对布基纳法索国家建设有贡献的研究成果。

【执笔者: 安孙子 信 (法政大学国际日本学研究所所长・教授)】

부르키나파소 와가두구대학 로와다 교수의 연구소 방문

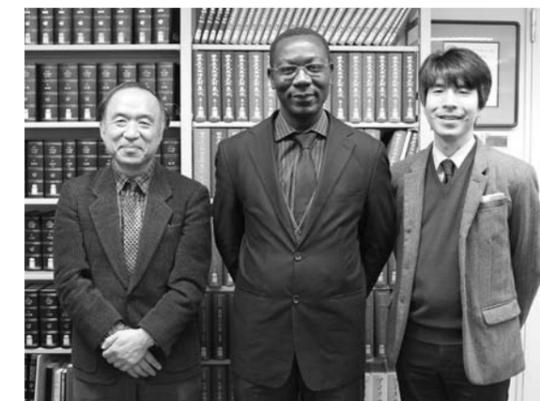
일 시: 2012년 2월 2일(목) 12:00~

장 소: 호세이(法政)대학 국제일본학연구소(HIJAS)

서아프리카 부르키나파소의 수도 와가도구에 있는 국립 와가도구대학 법학부의 오구스탄 로와다 교수가 2월 2일, 연구소를 방문했다. 로와다 교수는 국제교류기금의 초청으로 본교 방문 전날인 2월 1일 일본에 입국했

다. 한달 반 동안의 체재기간에는 객원연구원으로서 본 연구소를 거점으로 연구활동을 할 예정으로, 이날은 이에 앞서 인사차 연구소를 방문했다. 일본에서의 근대국가 탄생, 메이지(明治)유신이 이번 연구의 주제다. 환담회에서는 부르키나파소의 향후 국가정립에 기여할 수 있는 연구성과를 올리고 싶다는 포부를 밝혔다.

【기사집필: 아비코 신 (호세이대학 국제일본학연구소 소장, 문학부 교수)】



左から: 安孫子 信 所長、オーギュスタン ロワダ 教授、鈴村 裕輔 研究員

新刊案内

日本民族の源流を探る 柳田國男『後狩詞記』再考
クライナー・ヨーゼフ

わが国に於ける民俗学の最初の書物『後狩詞記』。柳田國男を貫く日本民族・文化の構造と起源。日本民族とは如何なるものか、どこからきたか。「山の民」を始発にその問いに答える。

【目次】

『後狩詞記』のムラから学ぶ	野本 寛一
シシ肉の文化—その食用と供儀	原田 信男
山地農民の採集活動の多様性—日本列島からの展望—	池谷 和信
柳田國男が見た山茶—東京から九州、そして東南アジアへの視野拡大の可能性—	中村羊一郎
『後狩詞記』の背景をめぐる比較民族学—モンスーン・アジアの焼畑農耕民社会における狩猟—	佐々木高明
書簡に見る中瀬淳と柳田國男	石井 正己
柳田國男の日本—『後狩詞記』・『遠野物語』から『海南小記』や『海上の道』にいたる—	クライナー・ヨーゼフ



出版社：三弥井書店
本体価格：2200 円
ISBN：978-4-8382- 3228-4
発行年月：平成 24 年 8 月
判形・製本 A5 判・並製

ニューズレター NO.17 翻訳者紹介

(英語翻訳)

バーバラ・クロス (ロンドン大学 SOAS)

(中国語翻訳)

李 潤沢 (法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)

周 曙光 (法政大学国際日本学インスティテュート)

(韓国語翻訳)

金 英美 (法政大学国際日本学研究所学術研究員)

 法政大学国際日本学研究センター
国際日本学研究所

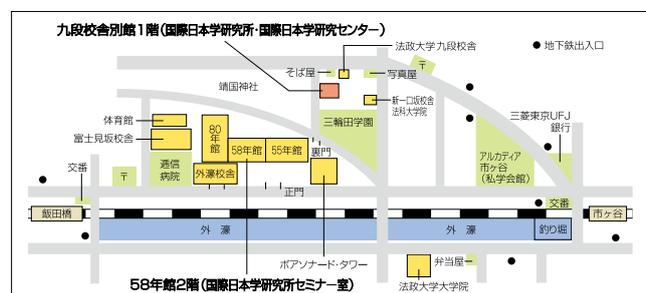
〒102-0073

東京都千代田区九段北 3-2-3 九段校舎別館 1 階

TEL：03-3264-9682 FAX：03-3264-9884

E-mail: nihon@hosei.ac.jp

URL: <http://hijas.hosei.ac.jp>



この冊子は再生紙を使用しています。